

船橋市夏見台遺跡

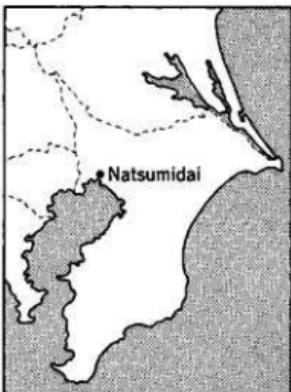
－船橋夏見郵政宿舎・簡易保険福祉事業団船橋夏見宿舎新築に伴う埋蔵文化財調査報告書－

1 9 9 2

関東郵政局
簡易保険福祉事業団
財団法人 千葉県文化財センター

船橋市夏見台遺跡

－船橋夏見郵政宿舎・簡易保険福祉事業団船橋夏見宿舎新築に伴う埋蔵文化財調査報告書－



1 9 9 2

関東郵政局
簡易保険福祉事業団
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

船橋市は東京湾沿岸に位置し、東京から至近距離にあることから早くから開発が行われ、それに伴う埋蔵文化財発掘調査例も相当数にのぼっています。それらの発掘調査により多くの貴重な資料が得られ、千葉県の歴史を考える上で大変重要な地域であることが判明してきております。

この船橋市のほぼ中央に位置する夏見台地も縄文時代から古代にわたる夏見台遺跡が所在するところとして知られ、過去にも數次にわたる調査が行われて、貴重な成果が報告されています。また、この一帯は閑静な住宅地であり、関東郵政局及び簡易保険福祉事業団も、ここにかつて船橋夏見郵政宿舎・簡易保険福祉事業団船橋夏見宿舎を建設しましたが、このたび建替の計画がなされました。

そのため千葉県教育委員会では、建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて関東郵政局をはじめとする関係諸機関と慎重な協議を重ねた結果、記録保存もやむを得ないとの結論に達し、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなりました。調査は平成2年度に実施し、その結果古墳時代の竪穴住居跡5軒、先土器時代の石器集中地点7地点等を検出しました。特に先土器時代については夏見台遺跡群では初めての検出例であり、学術的にも貴重な成果を得ることが出来ました。

今回整理作業が終了し、その成果をここに刊行するはこびとなりました。本書が、学術的資料としてはもとより、広く一般に、郷土史に対する理解を深めるために活用されることを願ってやみません。

おわりに、関東郵政局、簡易保険福祉事業団、千葉県教育厅生涯学習部文化課、船橋市教育委員会及び地元関係者の多大なる御指導・御協力に深くお礼を申し上げるとともに、発掘調査等に御協力頂いた調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

平成4年3月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 岩瀬 良三

例　　言

1. 本書は、関東郵政局による船橋夏見郵政宿舎及び簡易保険郵便年金福祉事業団船橋夏見宿舎の新築に伴い調査した、船橋市夏見台遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、千葉県教育委員会の指導のもとに、関東郵政局及び簡易保険郵便年金福祉事業団との委託契約に基づき、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、調査部長 堀部昭夫、部長補佐 阪田正一、班長 上野純司の指導のもとに技師 四柳 隆が担当し、平成2年11月1日から平成3年2月28日まで実施した。
4. 整理作業及び本書の執筆・編集は、調査部長 天野 努、部長補佐 佐久間豊、班長 上野純司の指導・助言のもとに技師 四柳 隆が担当し、平成3年7月1日から平成3年9月30日まで実施した。
5. 調査で使用したコード番号は、204（市町村コード）-006（遺跡コード）である。
6. 本書に使用した地図のうち、第3図は国土地理院発行の1:25,000船橋及び習志野を合成して、第2図は船橋市発行の都市計画図1:2,500No27及びNo28を合成して、第1図は第一軍管陸軍迅速測図1:20,000八幡村を使用したものである。また、挿図も含めて、方位はすべて座標北を示すものである。
7. 本書の図版1・2に使用した航空写真は、京葉測量株式会社の撮影によるものである。
8. 本書に収録した遺物及び記録類は、すべて当文化財センターに保管している。
9. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関及び各位には多大なる御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略）

千葉県教育庁生涯学習部文化課 船橋市教育委員会 船橋市遺跡調査会

関東郵政局 簡易保険福祉事業団

佐藤武雄 斎藤太郎 中村宣弘 道上 文 後藤美智子 栗原薰子 糸日谷玲子

10. 本書に於ける実測図の凡例は以下のとおりである。

遺構関係

| | |
|--|----------|
| | 貼床 |
| | カマド構築材 |
| | 炉・焼土ブロック |
| | 櫻乱 |

遺物関係

| | | |
|------|--|-----|
| 黒色處理 | | 土器 |
| 赤色塗彩 | | 須恵器 |

本文目次

| | |
|-----------------|----|
| 序 文 | |
| 例 言 | |
| I 序 章 | 1 |
| 1. 調査に至る経緯 | 1 |
| 2. 遺跡の位置と概観 | 1 |
| 3. 周辺の遺跡 | 3 |
| 4. 調査の経過と概要 | 6 |
| II 先土器時代 | 8 |
| 1. 基本層序 | 8 |
| 2. 石器集中地点の概要 | 8 |
| 3. 第1ブロック | 9 |
| 4. 第2ブロック | 10 |
| 5. 第3ブロック | 12 |
| 6. 第4ブロック | 15 |
| 7. 第5ブロック | 15 |
| 8. 第6ブロック | 17 |
| 9. 第7ブロック | 18 |
| III 古墳時代 | 20 |
| 1. 上層遺構概要 | 20 |
| 2. 001住居跡 | 20 |
| 3. 002住居跡 | 24 |
| 4. 003住居跡 | 28 |
| 5. 004住居跡 | 30 |
| 6. 005住居跡 | 33 |
| 7. ピット | 35 |
| IV ま と め | 40 |
| 1. 各住居跡の時期と特徴 | 40 |
| 2. 夏見台遺跡群の集落の移動 | 40 |
| V スダレ状炭化物分析結果 | 43 |

挿図目次

| | |
|------------------------|----|
| 第1図 夏見台遺跡発掘区と周辺の環境 | 2 |
| 第2図 夏見台遺跡の位置と周辺の地形 | 3 |
| 第3図 周辺の遺跡 | 5 |
| 第4図 遺構配置図 | 7 |
| 第5図 立川ローム基本層序 | 8 |
| 第6図 第1, 2ブロック出土状況 | 10 |
| 第7図 第1ブロック出土石器 | 10 |
| 第8図 第2ブロック出土石器 | 11 |
| 第9図 第3ブロック出土状況 | 12 |
| 第10図 第3ブロック出土石器（1） | 13 |
| 第11図 第3ブロック出土石器（2） | 14 |
| 第12図 第4, 5ブロック出土状況 | 15 |
| 第13図 第4, 5ブロック出土石器 | 16 |
| 第14図 第6ブロック出土状況 | 17 |
| 第15図 第6ブロック出土石器 | 17 |
| 第16図 第7ブロック出土状況 | 18 |
| 第17図 第7ブロック出土石器 | 18 |
| 第18図 001住居跡 | 21 |
| 第19図 001住居跡遺物出土状況 | 22 |
| 第20図 001住居跡出土遺物 | 23 |
| 第21図 002住居跡 | 25 |
| 第22図 002住居跡遺物及び炭化物出土状況 | 26 |
| 第23図 002住居跡出土遺物 | 27 |
| 第24図 003住居跡 | 28 |
| 第25図 003住居跡出土状況及び出土遺物 | 29 |
| 第26図 004住居跡 | 31 |
| 第27図 004住居跡出土状況及び出土遺物 | 32 |
| 第28図 005住居跡 | 34 |
| 第29図 005住居跡出土状況及び出土遺物 | 35 |
| 第30図 ピット（1） | 36 |
| 第31図 ピット（2） | 37 |
| 第32図 ピット（3） | 38 |
| 第33図 ピット（4） | 39 |

表 目 次

| | |
|----------------------|----|
| 第1表 石器出土状況凡例..... | 9 |
| 第2表 第1ブロック石器観察表..... | 18 |
| 第3表 第2ブロック石器観察表..... | 18 |
| 第4表 第3ブロック石器観察表..... | 19 |
| 第5表 第4ブロック石器観察表..... | 19 |
| 第6表 第5ブロック石器観察表..... | 19 |
| 第7表 第6ブロック石器観察表..... | 19 |
| 第8表 第7ブロック石器観察表..... | 18 |
| 第9表 スダレ状炭化物分析結果..... | 44 |

図 版 目 次

| | |
|---------------------------------|-------------------------------|
| 図版1 夏見台遺跡航空写真(1) 昭和42年 | 図版9 1. 002住居跡 全景 |
| 図版2 夏見台遺跡航空写真(2) 平成2年 | 2. 002住居跡 カマド内 遺物出土状況 |
| 図版3 1. 調査区(北西部分) 近景 | 3. 002住居跡 ズダレ状炭化物 出土状況 |
| 2. 調査区(南東部分) 近景 | 図版10 1. 003住居跡 全景 |
| 図版4 1. 夏見台地遠景(南西, 船橋市北 本町から) | 2. 003住居跡 遺物出土状況 |
| 2. 夏見台地遠景(東, 船橋市米ヶ 崎町から) | 3. 003住居跡 遺物出土状況 |
| 図版5 1. 立川ローム基本層序 | (部分) |
| 2. 第1ブロック 遺物出土状況 | 図版11 1. 003住居跡 勝藏穴内 遺物出土状況 |
| 3. 第2ブロック 遺物出土状況 | 2. 004住居跡 全景 |
| 図版6 1. 第3ブロック 遺物出土状況 | 3. 005住居跡 全景 |
| 2. 第4ブロック VII層中 遺物出 土状況 | 図版12 第1, 2ブロック 出土石器 |
| 3. 第4ブロック IXa~c層中 遺物出土状況 | 図版13 第3ブロック 出土石器 |
| 図版7 1. 第5ブロック 遺物出土状況 | 図版14 第4, 5, 6, 7ブロック 出土石器 |
| 2. 第6ブロック 遺物出土状況 | 図版15 1. 001住居跡 出土遺物 |
| 3. 下層調査風景 | 2. 002住居跡 出土遺物(1) |
| 図版8 1. 001住居跡 全景 | 図版16 1. 002住居跡 出土遺物(2) |
| 2. 001住居跡 カマド | 2. 003住居跡 出土遺物 |
| 3. 上層調査風景 | 3. 004住居跡 出土遺物 |

I 序 章

1. 調査に至る経緯

船橋夏見郵政宿舎及び簡易保険福祉事業団船橋夏見宿舎は、建築以来30有余年を経過して老朽化が問題となり、設置者である関東郵政局及び簡易保険福祉事業団によって建替の計画がなされた。この建設予定地にあたる船橋市夏見台地区は、縄文時代から歴史時代にわたる大規模な遺跡群の所在する地域として從来から周知されており、過去にも數次にわたる発掘調査が実施されてきた。その結果多くの貴重な資料が得られており、考古学史上も大変重要な地域として注目されてきた。

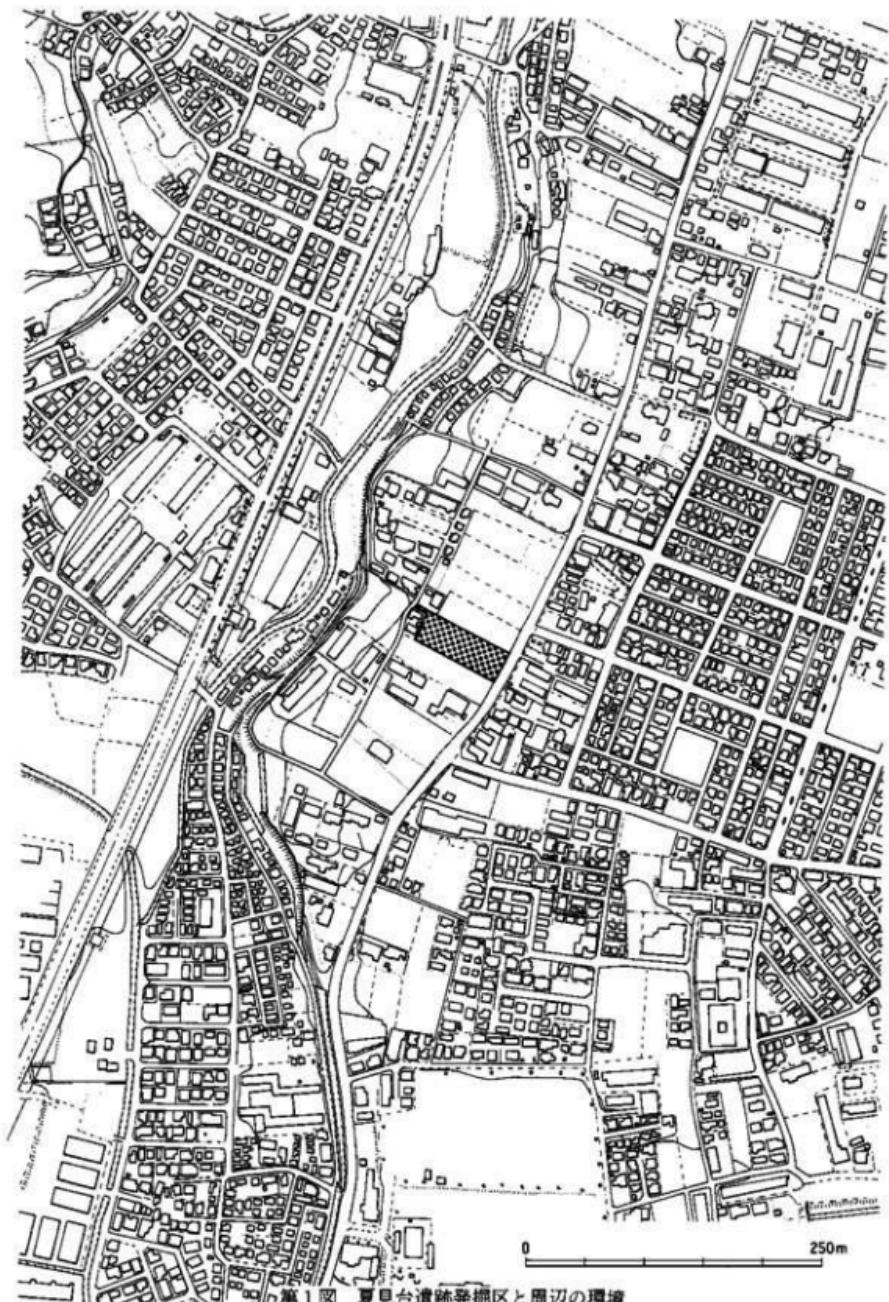
このため千葉県教育委員会では、建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、関東郵政局及び簡易保険福祉事業団をはじめとする関係諸機関と慎重な協議を重ね、その結果、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになった。発掘調査及び整理作業については、財團法人千葉県文化財センターと関東郵政局及び簡易保険福祉事業団との委託契約に基づき、平成2年11月1日から平成3年2月28日まで発掘調査、平成3年7月1日から9月30日まで整理作業を実施することになった。

2. 遺跡の位置と概観

夏見台遺跡群は、千葉県北西部から北東部の広い範囲に展開する下総丘陵が、船橋市のほぼ中央を南流する海老川とその支流によって開析された谷間に面する舌状台地上に立地し、標高は19~21mを測る。船橋市内に存在する著名な遺跡群のほとんどは、概ね同様に形成された舌状台地上に立地している。台地南端より約1.5km北方には東西両方向より小規模な支谷が入り込んで台地の幅が狭くなっている部分があり、この付近以南が夏見台遺跡群として周知されている。台地上の平坦部は、船橋市街から北へ約1kmと至近距離であるとともに、かなり早い段階から交通網が発達していたことから、夏見台団地をはじめ古くから宅地としての開発が進み、現在も台地上ほぼ全域が閑静な住宅街となっている。台地の東、南、西の3面を取り囲んでいる冲積低地は水田として利用されており、台地上面との比高差は約15mを測る。近年はこの冲積低地にも宅地化の波が襲い、特に台地の西側には新築の高層住宅が林立している。

今回調査した夏見台遺跡は夏見台地の南西端にあたり、行政的には船橋市夏見町556-1他に所在する。調査区の西側は、15m程で沖積低地との境をなす急斜面が形成されており、いわゆる台地の肩の部分にあたる。斜面の直下には水源を前貝塚町に持つ上長津川が南流し、約500m南で海老川本流へと合流している。

夏見台地では、古くから宅地開発が行われてきたことは先にも述べた。そして、それに伴う確認調査や発掘調査が數次にわたって実施されてきており、多くの貴重な成果が報告されてい



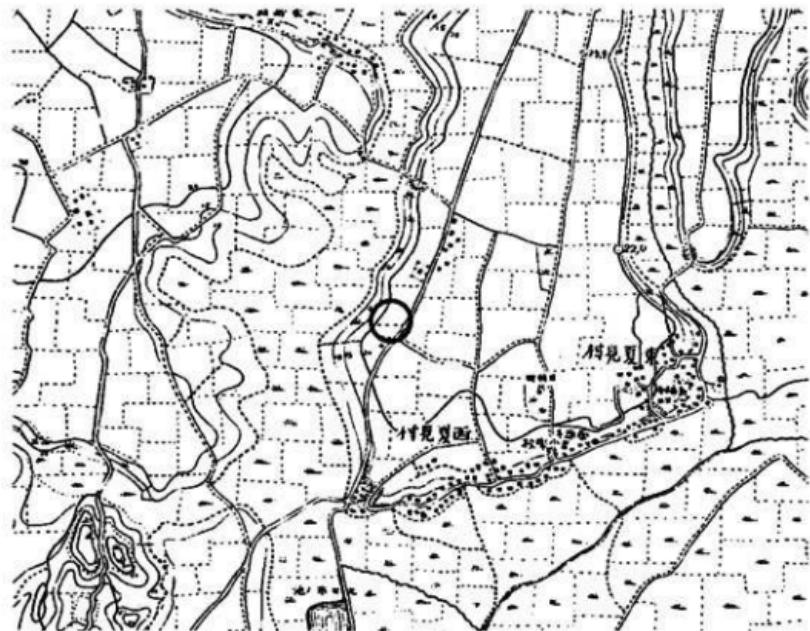
第1図 夏見台遺跡発掘区と周辺の環境

る。しかし、それらの報告はすべて台地東側（夏見台遺跡・八栄北遺跡）及び南側（夏見大塚遺跡）に限られており、台地中央部や西側の地域では若干の分布調査や小規模な確認調査が行われたにとどまっている。そして小規模な遺物の散布は數か所確認されているが（夏見台西遺跡・船橋中学校校庭遺跡等）、遺構は検出されていない。

これらの点を鑑みて、今回の調査は台地西側に於ける初めてのまとまった範囲を対象とする調査であり、その様相の一端が垣間見られるということで注目された。

3. 周辺の遺跡

夏見台遺跡群内では、分布調査及び開発に伴う確認調査の結果、これまでに9ヶ所の遺跡が周知されている。しかし、笠塚古墳、花輪塚古墳、夏見古墳等の古墳はいずれも既に削平されたり消滅、または残存していても原形をとどめていない状態である。八栄北遺跡は遺跡群の東北隅に位置し、縄文時代前期及び古墳時代後期を主体とする。夏見台遺跡という名称では4次にわたって調査されており、古墳時代後期を中心とする集落が検出されている。どの調査地点も台地東側の縁辺に立地する。また、台地南縁は夏見大塚遺跡という名称で6次にわたる調



第2図 夏見台遺跡の位置と周辺の地形（陸軍迅速測図 1:20,000）

査が実施されており、弥生時代及び奈良・平安時代を主体とする集落跡であることが判明している。船橋市史に紹介された船橋中学校校庭遺跡は、夏見大塚遺跡の一部と考えられる。台地の南東端の半島状に突出した部分には夏見城跡が存在する。周辺の踏査を試みたが、既に宅地となっており城跡に関連する遺構は確認できなかった。台地北西には夏見台西遺跡が所在するが、分布調査により僅かな散布が確認されているのみであり、遺構は検出されていない。台地中央部はすでに住宅街が完成しており分布調査が困難な状態ではあるが、現在のところ遺物の散布等は確認されていない。こうしてみてみると、同一の台地上でも地点によってかなり異なった様相が窺える。

続いて夏見台遺跡群周辺について見てみると、海老川の東側には北から高根川、飯山満川、中野木川、宮本川といった小支流が西流しており下総丘陵を深く開析している。こうして形成された舌状台地上には高根遺跡群、東町・飯山満遺跡群、中野木台遺跡群、宮本台遺跡群等著名な遺跡群が密集しており、それぞれ異なった様相を示している。

これらの北方、約3kmには、先土器時代の石器群が大量に出土したことで著名な西の台遺跡がある。この遺跡も海老川本流と支流の北谷津川の最奥部にはさまれた台地上に立地する。

夏見台地の西側に目を向けてみると、北西約2km、中山競馬場周辺の地域は、貝塚が多く分布するところとして知られている。古作貝塚、飛の台貝塚、前貝塚堀込貝塚、上山台遺跡群内に所在する藤原觀音堂貝塚、後貝塚、前貝塚等があげらる。飛の台貝塚の西方約1kmには夏見台遺跡群と近い時期の遺跡が集中する印内台遺跡群があるが、これは真間川水系に属する。

周辺の遺跡

| | | |
|------------------|--------------|--------------|
| 1 本 報 告 地 点 | 12 宮 前 | 23 高 根 城 跡 |
| 2 笹 塚 古 墳 | 13 坂 ノ 上 | 24 唐 沢 台 貝 塚 |
| 3 八 荣 北 | 14 後 貝 塚 | 25 米 ケ 崎 城 跡 |
| 4 夏 見 台 (1 次) | 15 前 貝 塚 | 26 米 ケ 崎 |
| 5 夏 見 台 西 | 16 前貝塚堀込貝塚 | 27 台 煙 |
| 6 花 輪 塚 古 墳 | 17 飛 の 台 貝 塚 | 28 東 町 |
| 7 船 橋 中 学 校 校 庭 | 18 宝 塚 | 29 西 駿 河 台 |
| 8 夏 見 大 塚 | 19 西 の 台 | 30 宮 本 台 貝 塚 |
| 9 夏 見 古 墳 | 20 オ ラ ン ト 塚 | 31 峰 台 古 墳 |
| 10 夏 見 城 跡 | 21 南 堀 込 | 32 前 原 塚 古 墳 |
| 11 藤 原 觀 音 堂 貝 塚 | 22 立 場 | 33 船 橋 城 跡 |



第3図 周辺の遺跡

4. 調査の経過と概要

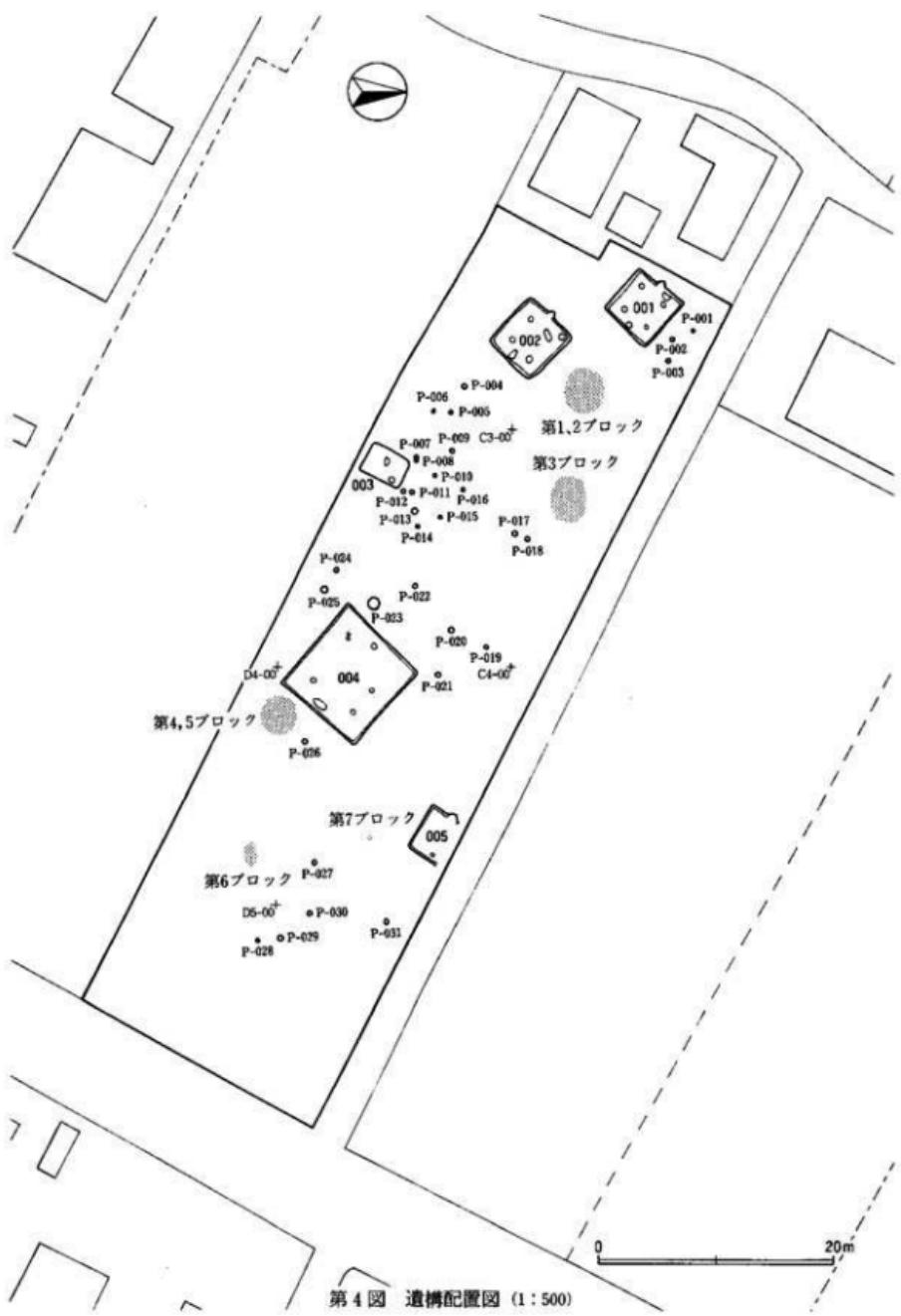
今回の調査は、広大な夏見台遺跡群のうち船橋夏見郵政宿舎・簡易保険福祉事業団船橋夏見宿舎の建設予定地にあたる2,075m²について、平成2年度に実施したものである。調査前より周囲の畠地等の遺物散布状況から遺構の存在は確実と思われたため、平成2年11月1日より重機を使用して表土除去を開始し、同時に周辺の環境整備と設営作業及び測量に着手した。調査方法については、調査地が船橋市街から程近い住宅地内で、隣接する県道が重機の搬出入も困難なほど交通過多であることを考慮して、排土は調査地内で処理せざるを得ないと判断し、まず調査区北西側について調査を実施し、終了次第排土を移動して南東半分に着手することとした。なお、調査区北に隣接する私道も調査対象範囲に含まれていたが、生活道路として使用されていること、ガスや水道の本管が埋設されていることから、調査範囲から除外することとした。

発掘区は、まず20×20mの大グリッドを設定し、北から南へ向かってA～E、西から東へ向かって1～5とした。さらに大グリッドを2×2mの小グリッド100個に分割し、北西隅を基準に東へ00～09、南へ00～90、南東隅を99とした。11月4日より精査を開始し、竪穴住居跡4軒やピットと思われるプランを検出したのち、北側から順次遺構ナンバーを付して調査を行った。なお、精査時に先土器時代のものとみられるメノウの剥片が出土し、石器集中地点の検出を期待させた。11月下旬からはピットの調査を開始し、12月までに25基の調査を完了した。並行して12月上旬からは下層確認調査を実施し、2地点で石器を検出、即時に本調査に移行した。

平成3年に入り、1月中旬までに北西半分の調査をすべて完了し、排土を移動して南東半分の調査を開始した。南東半分では予想より上層遺構が少なく、住居跡1軒とピット6基にとどまったため同時に調査を開始し、1月下旬には並行して下層確認調査に着手した。3地点で石器の出土を確認し、本調査に移行した。うち1地点は単独出土であったが、他の2地点はある程度の広がりを持つ集中地点として認識された。2月26日までに発掘調査を終了し、翌27日撤収作業を行って全ての現場作業を完了した。

整理作業は、平成3年7月1日より着手し、7月中旬までに水洗・注記・復元作業を完了し、同時に図面整理作業も下旬までに完了した。その後実測・トレースを8月中旬まで行い、写真撮影・挿図作成に移行した。9月上旬からは図版作成及び原稿執筆に着手し、9月30日までに全ての作業を終了、平成3年度下半期の刊行となった。

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡5軒、ピット31基、先土器時代石器集中7地点である。竪穴住居跡はいずれも古墳時代後期のもので、若干の時間差が認められる。ピットについては遺物が出土せず、残念ながら時期決定はできない。先土器時代石器集中地点は夏見台遺跡群内では初の検出例であり、該期文化層の存在が明らかになった。文化層としては立川ローム第III層（ソフトローム）に包含されるもの、立川ローム第VII層からIXa層（第2黒色帶）に含まれるもの、大きく2枚に分けられる。



第4図 遺構配置図(1:500)

II 先土器時代

1. 基本層序

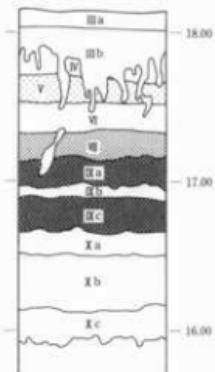
夏見台遺跡の調査を実施した平成2年度は、当文化財センターに於て立川ローム層の層序区分が問題となり、県内各地域の様相等も考慮して、活発な議論を展開した時期であった。結論としては、あくまでも暫定的なものという前置き付きで、武藏野台地の層序区分と対比して線引きするということで落ち着いた。なお、この点については現在も検討中である。

今回の分層もその結論を基準として行った。まずソフトローム化した部分のすべてをIII層とした。夏見台遺跡では、ソフトローム層最上部に約10cmの層厚を持って黄白色のやや明るい色調を呈する部分が存在し、調査区全域にわたって安定した堆積がみられた。この層については新期テフラの可能性を指摘する声もあったが、下位のソフトローム層との間層を持たず、両層にわたって同一の石器群が含まれることから立川ローム層最上層と認定し、それぞれIII a・III b層とした。ただし、III a層が新期テフラであることを否定する積極的な根拠はない。続いて第一黒色帯をV層、ソフトローム層と第1黒色帯の間層で、黄色味の強い部分をIV層とした。VI層は始良Tn火山灰のブロックを主体とする層のみとし、上下の黒色帯に拡散している部分は含めなかった。VII・IX a・IX b・IX cの各層が第2黒色帯に当たり、かなり明瞭に分層が可能であった。VII層は淡黒褐色を呈し、上部には始良Tn火山灰の拡散が見られる。IX a層及びIX c層はかなり黒味が強く、特にIX c層の一部では腐食土を思わせるほどであった。両層に挟まれて、層厚は薄い（3～5cm）ながらも黄色味がかったIX b層が明瞭に分層できた。X層は立川ローム最下層で、色調によりa～cの3層に分層した。X b層のみ地点によって層厚に差があるが、各層とも調査区全域にわたって安定した堆積がみられた。

千葉県内でも東葛飾地方は立川ロームの分層が比較的容易であり、また武藏野台地との関係も明瞭に対比できることが多い。当地域を指標として、県内他地域の層序区分をより明瞭なものにしていく必要があろう。

2. 石器集中地点の概要

今回の調査では、調査区全域にわたって下層確認調査を実施したところ、5地点で石器の出土を確認した。本調査に移行して拡張したところ、1地点については碎片1点のみの単独出土であったが、残る4地点ではある程度の集中をもって分布していることが確認できた。石器は総数47点が出土しているが、使用痕や2次加工の認め



第5図 立川ローム層基本層序

られる剥片は見られるものの、製品として認定できるものは検出されなかった。うち2地点では明らかに出土層位の異なる石器が認められたため、それぞれ別のブロックと認定することとした。以下、単独出土地点も含めて各集中地点を第1～7ブロックと称して記述を進める。なお、出土状況図に使用したドットは第1表に定めたとおり、石材と器種を組み合わせて使用した。

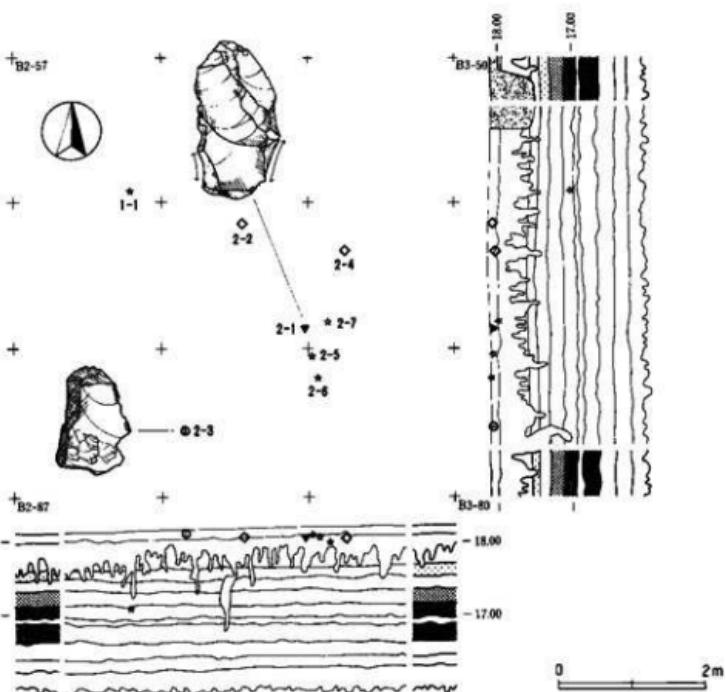
文化層としては、ソフトローム層であるIII層を中心に含まれるものと第2黒色帯であるVII～IX層に含まれるものとの、大きく2期に分けることができる。第2、3ブロックはIII層を、第4、6ブロックはVII～IX層を主体とし、第1ブロックはIXa層、第5ブロックはIII層、第7ブロックはIXc層からの単独出土であった。出土した石器の石材的な特徴として、珪質頁岩は両文化層共に見られるが、III層には安山岩や変成岩が多く、第2黒色帯中にはチャート及びメノウが多く含まれていた点があげられる。

3. 第1ブロック (第6・7図、図版5・12)

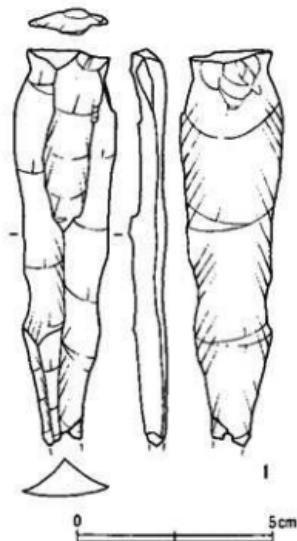
IXa層で1点出土している。下層確認調査時にB2-57グリッドIXa層より1の剥片が出土し、夏見台遺跡群で初めて先土器時代の存在が明らかになった。確認調査の成果に基づいて拡張したところ、ソフトローム層中では6点の石器が出土し第2ブロックとして認定したが、第2黒色帯では石器群の拡がりは確認できなかった。出土した石器は、安山岩の縦長剥片である。先端部は風化して脆くなってしまっており、欠損している。

| | 剥片 | U剥片 | R剥片 | 剥片利用石核 | 礫 | 碎片 |
|------|----|-----|-----|--------|---|----|
| チャート | ▲ | | ▲ | | | △ |
| 頁岩 | □ | ■ | | | | □ |
| 珪質頁岩 | ▼ | ▼ | ▼ | ▼ | | |
| メノウ | ○ | ● | ○ | | | ○ |
| 安山岩 | ★ | | | | | * |
| 凝灰岩 | ◎ | | | | | |
| 流紋岩 | * | | | | | |
| 砂岩 | ○ | | | ※ | | |
| 変成岩 | ◇ | | | | ◆ | ○ |

第1表 石器出土状況凡例



第6図 石器第1, 2ブロック出土状況

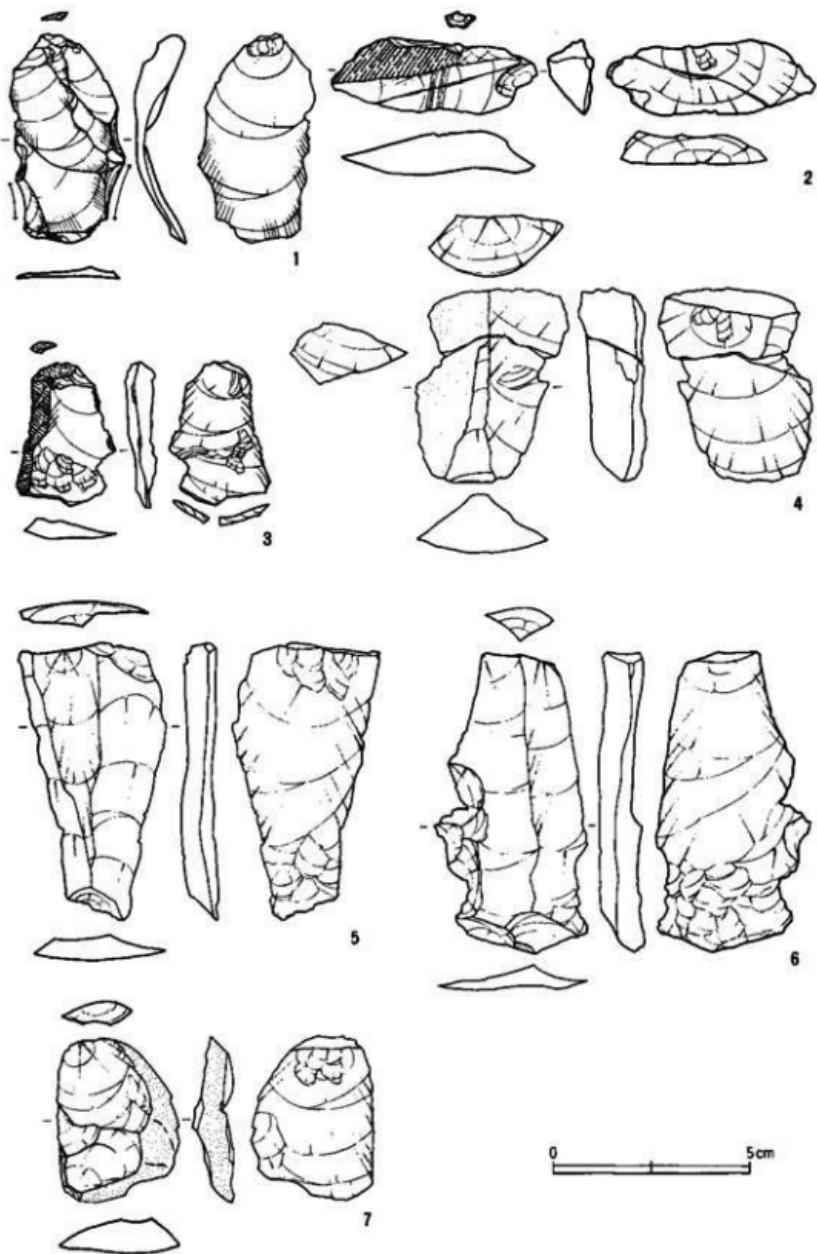


第7図 第1ブロック出土石器

4. 第2ブロック (第6・8図, 図版5・12)

III層で7点出土している。上層遺構の確認面精査中に、3のメノウの剥片がソフトロームに突き刺さるように出土し、石器集中ブロックの存在を期待させた。また確認調査時にB2-57グリッドIX a層より石器が出土したため拡張したところ、ソフトローム層中で出土した6点の石器を確認し、あわせて7点を第2ブロックとして扱う。

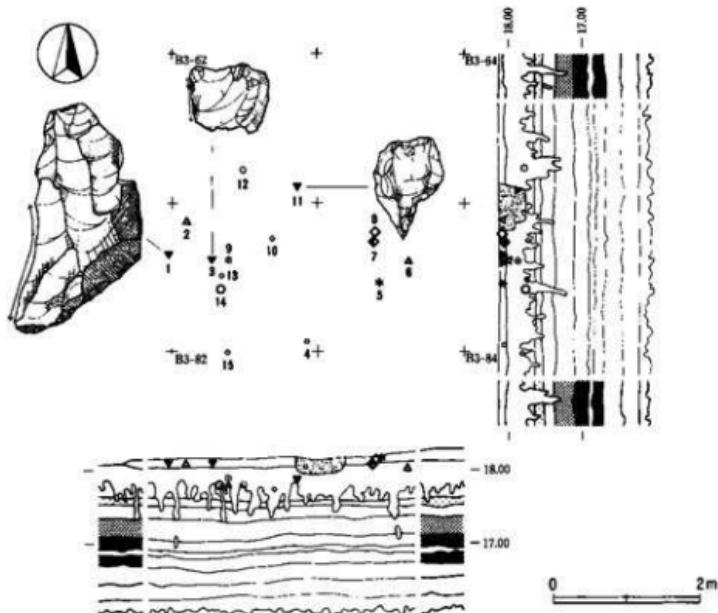
1はチャートの剥片で、先端付近の両サイドに使用痕が認められる。3はメノウの剥片で、2次加工痕が認められ、剥片剥離後に先端が折断されている。2、4は変成岩の剥片で、2は先端部の一面には幅2mm程度の溝が2条認められ、砥石等に使用された可能性がある。5～7はいずれも安山岩の剥片で、5と6は黄褐色を呈する同一石材によるものである。



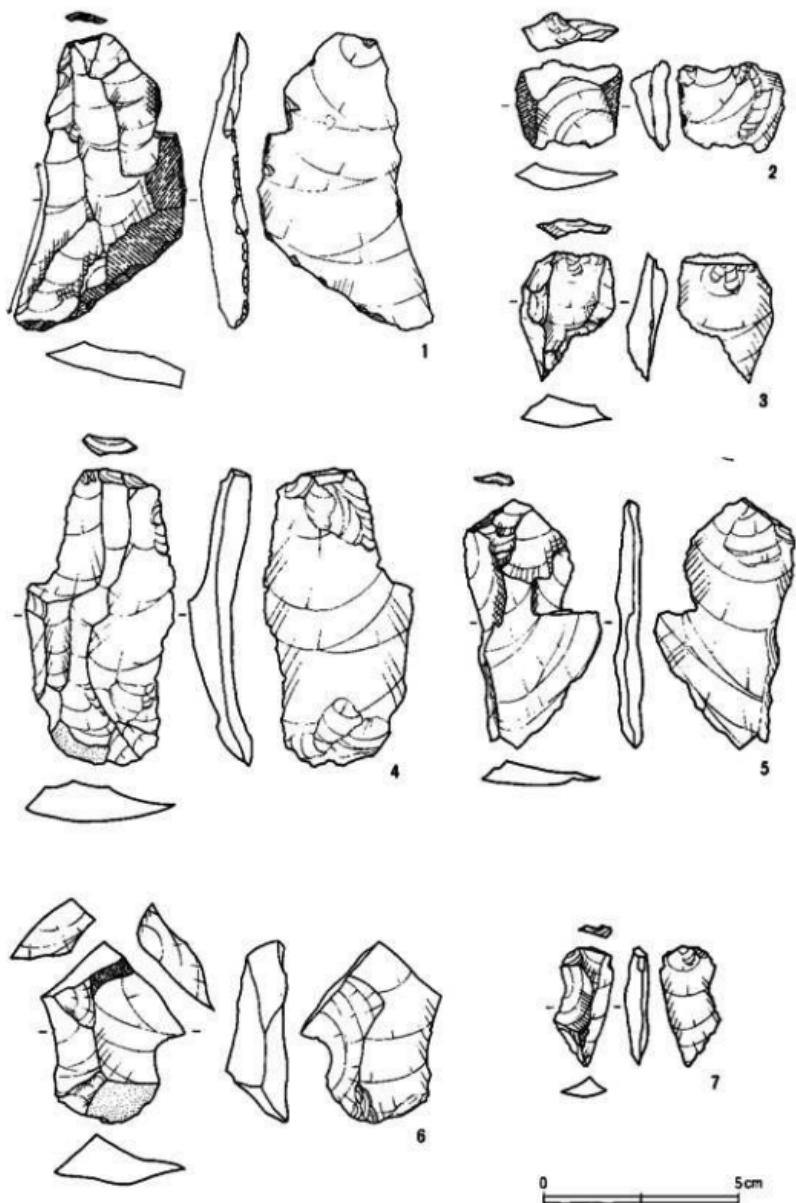
第8図 第2ブロック出土石器

5. 第3ブロック (第9・10・11図、図版6・13)

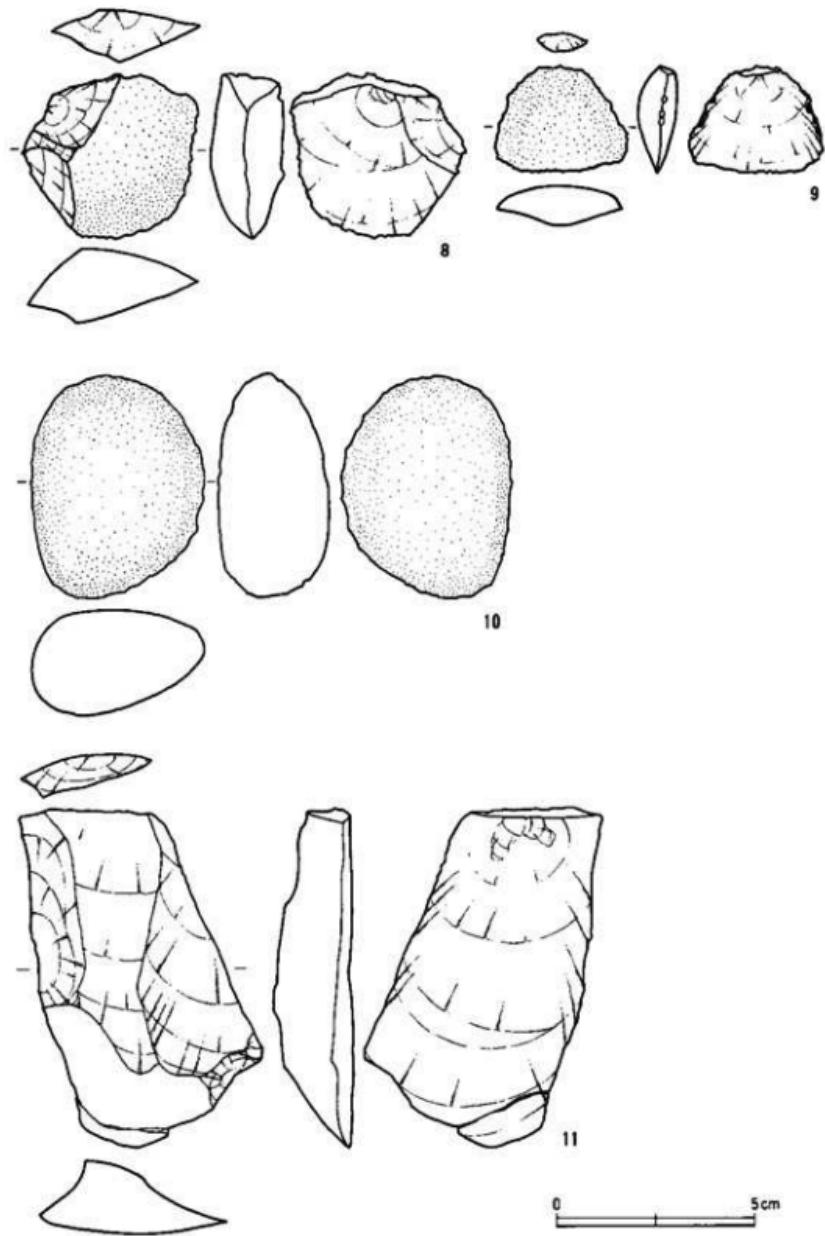
III a・III b層中から総数15点が出土しており、レベル差は最大40cm程であった。1、2は同一石材の珪質頁岩で、暗黄褐色と灰褐色が縞状に混じた、千葉県に於て特徴的に出土するものである。1は先端付近に2次加工痕が認められる他、側縁の一方には明瞭な使用痕が残っている。2も使用痕のある剥片であるが、1ほど明瞭なものではない。他に同一石材の碎片が1点出土している。3も珪質頁岩の剥片であるが、1や2とは別石材である。4は白色を呈する流紋岩の剥片である。5及び6はいずれもチャートの剥片であるが、5は灰褐色、6は乳白色を呈する別石材のものである。7は白色半透明のメノウを石材とする剥片である。8は砂岩の剥片利用石核である。表面の、先端に近く最も古い剥離面はかなり風化しており、他の剥離との時間差が感じられる。9～11は変成岩（ホルンフェルス）によるものである。9と11は剥片で、特に11の剥片はかなり風化しており、調査時点で先端付近がやや剥落してしまった。10は礫である。敲打痕や擦痕、被熱による赤化等は認められない。変成岩は第2ブロック以外からは出土していない。



第9図 石器第3ブロック出土状況



第10図 第3ブロック出土石器(1)



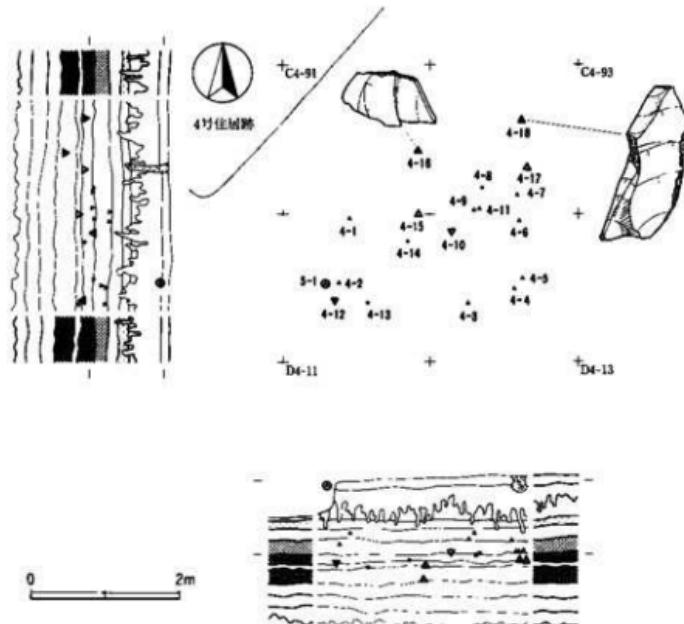
第11図 第3ブロック出土石器(2)

6. 第4ブロック (第12・13図、図版6・14)

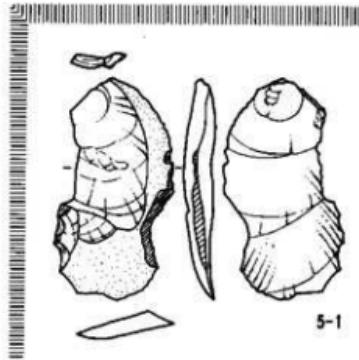
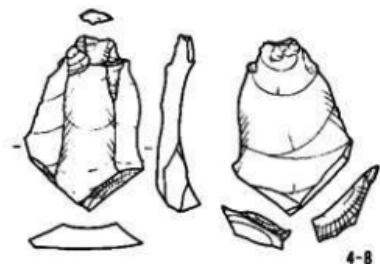
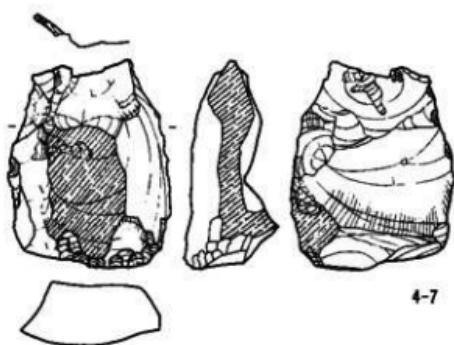
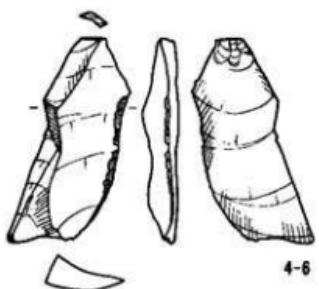
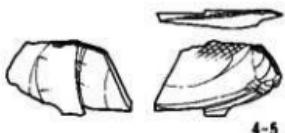
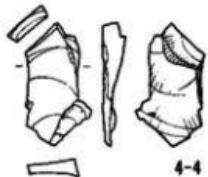
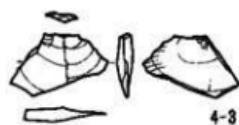
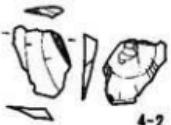
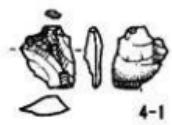
総数18点で、今回調査した中では最もまとまって出土したブロックである。始良Tn火山灰を中心とするVI層から第2黒色帯下部のIXc層にわたって出土しており、最大レベル差は60cmを越える。1～5は緑色を呈するチャートの同一石材で、他にも図示出来なかった7点の碎片が出土している。4と5は剥片で、特に5は剥片剥離工程の後、打面に2次加工を施している。6もチャートの剥片であるが、1～5とは別の石材を用いている。一方の側縁には明瞭な2次加工が施されている。7は珪質頁岩の剥片利用石核であるが、製品として加工しようとしたためか先端の一部に2次加工痕が残る。8は珪質頁岩の剥片で、先端は剥片剥離後に折断されている。

7. 第5ブロック (第12・13図、図版7・14)

第4ブロックの本調査中にIII層より出土した凝灰岩の剥片である。さらに拡張を試みたが、遺物の検出には至らなかった。挿図中で原石面及び側面に示した斜線は調査時に破損した部分で、実際には弧状のサイドを持って出土したものと思われる。凝灰岩は今回の調査では唯一の出土であった。



第12図 第4, 5ブロック出土状況

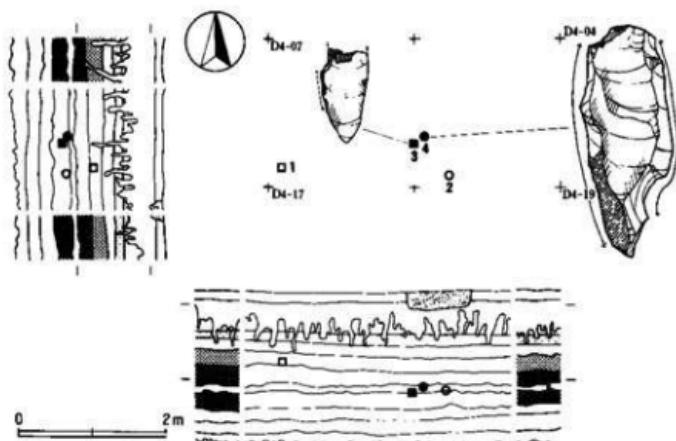


0 5cm

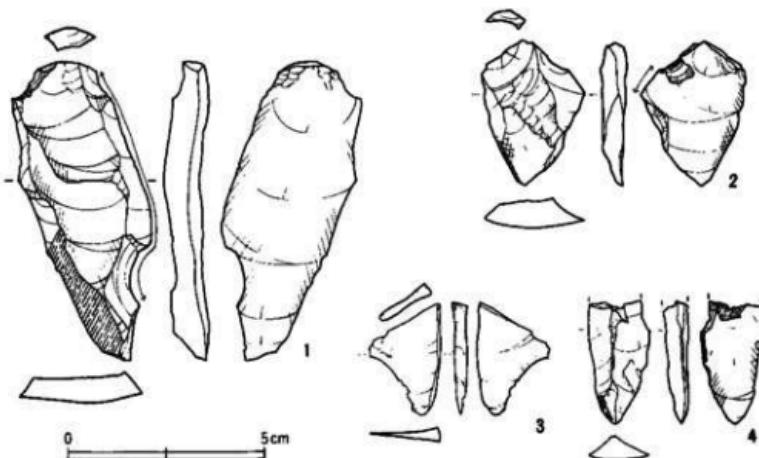
第13図 第4, 5 ブロック出土石器

8. 第6ブロック (第14・15図、図版7・14)

第2黒色帯中で总数4点の出土が見られ、1はVII層、その他はIX b~IX c層の境界付近に分布する。1は半透明の白色を呈するメノウの剥片で、一方の側縁には使用痕が認められる。かなり重量感のある石器である。2は第1ブロックの4と類似するメノウを石材とする剥片である。3と4は珪質頁岩の剥片で、同一石材と思われる。核心部が黒褐色、表面付近は暗緑色を呈する石材であるため、両者の色調は異なる。



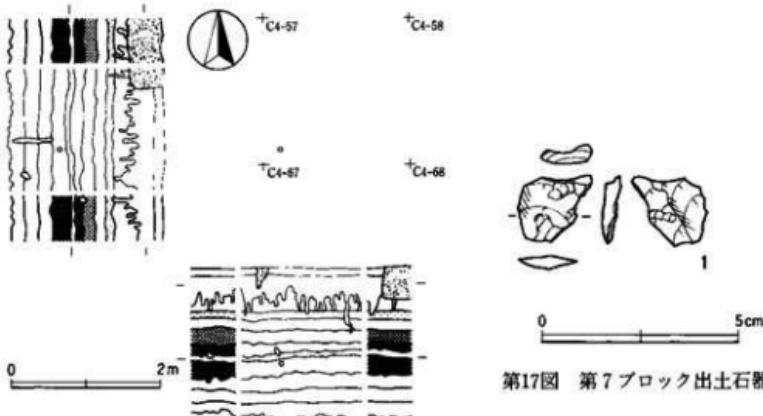
第14図 第6ブロック出土状況



第15図 第6ブロック出土石器

9. 第7ブロック (第16・17図、図版14)

確認調査で碎片1点出土がしたもの、それ以上の広がりを見せず、単独出土であることを確認した。第2黒色帶最下部のIXc層から出土したもので、石材は半透明の乳白色を呈するメノウであるが、挟雜物を多く含んでいる。頭部調整の際にできた碎片である。



第16図 第7ブロック出土状況

第17図 第7ブロック出土石器

第2表 第1ブロック石器観察表

(単位:長・幅・厚=mm, 重量=g)

| No | 擲図No | 石材 | 分類 | 長 | 幅 | 厚 | 重量 | 備考 |
|----|------|-----|----|-------|------|-----|------|----|
| 1 | 1 | 安山岩 | 剝片 | 100.7 | 26.4 | 9.7 | 23.8 | |

第3表 第2ブロック石器観察表

| No | 擲図No | 石材 | 分類 | 長 | 幅 | 厚 | 重量 | 備考 |
|----|------|------|-----|------|------|------|------|--------|
| 1 | 2 | 変成岩 | 剝片 | 52.4 | 17.8 | 11.0 | 10.4 | |
| 2 | 1 | 珪質頁岩 | U剝片 | 54.1 | 27.3 | 7.6 | 7.3 | |
| 3 | 6 | 安山岩 | 剝片 | 76.2 | 37.8 | 7.5 | 20.6 | |
| 4 | 5 | 安山岩 | 剝片 | 69.9 | 34.5 | 7.1 | 18.8 | |
| 5 | 7 | 安山岩 | 剝片 | 42.0 | 30.8 | 9.1 | 12.9 | |
| 6 | 4 | 変成岩 | 剝片 | 48.4 | 35.4 | 16.7 | 30.2 | 3と同一石材 |
| 7 | 3 | メノウ | R剝片 | 35.5 | 22.4 | 7.3 | 4.7 | |

第8表 第7ブロック石器観察表

| No | 擲図No | 石材 | 分類 | 長 | 幅 | 厚 | 重量 | 備考 |
|----|------|-----|----|------|------|-----|-----|----|
| 1 | 1 | メノウ | 碎片 | 16.6 | 16.8 | 3.9 | 1.0 | |

第4表 第3ブロック石器観察表

| No | 標図No | 石 材 | 分 類 | 長 | 幅 | 厚 | 重量 | 備 考 |
|----|------|------|--------|------|------|------|------|--------|
| 1 | 1 | 珪質頁岩 | R 刺 片 | 76.2 | 37.3 | 10.0 | 20.6 | 一部使用痕有 |
| 2 | 6 | チャート | 刺 片 | 45.9 | 33.5 | 16.6 | 17.6 | |
| 3 | 2 | 珪質頁岩 | U 刺 片 | 20.8 | 26.6 | 8.8 | 4.3 | 1と同一石材 |
| 4 | | 珪質頁岩 | 碎 片 | | | | 0.3 | 1と同一石材 |
| 5 | 4 | 流紋岩 | 刺 片 | 74.7 | 37.5 | 11.7 | 21.5 | |
| 6 | 5 | チャート | 刺 片 | 62.5 | 30.5 | 7.0 | 11.0 | |
| 7 | 10 | 変成岩 | 砾 | 55.0 | 43.6 | 28.5 | 88.2 | |
| 8 | 11 | 変成岩 | 刺 片 | 86.9 | 48.3 | 18.6 | 80.6 | |
| 9 | 8 | 砂 岩 | 刺片利用石核 | 43.1 | 42.2 | 19.4 | 33.9 | |
| 10 | | 変成岩 | 碎 片 | | | | 3.2 | |
| 11 | 3 | 珪質頁岩 | R 刺 片 | 32.0 | 23.3 | 8.7 | 5.2 | |
| 12 | 9 | 変成岩 | U 刺 片 | 26.4 | 32.8 | 9.9 | 9.1 | |
| 13 | | 変成岩 | 碎 片 | | | | 2.8 | |
| 14 | 7 | メノウ | 刺 片 | 29.9 | 13.2 | 5.7 | 2.0 | |
| 15 | | 変成岩 | 碎 片 | | | | 0.7 | |

第5表 第4ブロック石器観察表

| No | 標図No | 石 材 | 分 類 | 長 | 幅 | 厚 | 重量 | 備 考 |
|----|------|------|--------|------|------|------|------|--------|
| 1 | | チャート | 碎 片 | | | | 0.1 | |
| 2 | | チャート | 碎 片 | | | | 0.4 | 1と同一石材 |
| 3 | | チャート | 碎 片 | | | | 0.1 | 1と同一石材 |
| 4 | 1 | チャート | 碎 片 | | | | 1.3 | 1と同一石材 |
| 5 | 3 | チャート | 碎 片 | | | | 0.6 | 1と同一石材 |
| 6 | | チャート | 碎 片 | | | | 0.3 | 1と同一石材 |
| 7 | | チャート | 碎 片 | | | | 0.1 | 1と同一石材 |
| 8 | | 安山岩 | 碎 片 | | | | 1.0 | |
| 9 | | チャート | 碎 片 | | | | 0.4 | 1と同一石材 |
| 10 | 8 | 珪質頁岩 | R 刺 片 | 43.3 | 28.6 | 10.9 | 8.8 | |
| 11 | | チャート | 碎 片 | | | | 0.1 | 1と同一石材 |
| 12 | 7 | 珪質頁岩 | 刺片利用石核 | 51.6 | 41.0 | 23.6 | 48.2 | |
| 13 | | 安山岩 | 碎 片 | | | | 0.1 | |
| 14 | | 安山岩 | 碎 片 | | | | 0.1 | |
| 15 | 4 | チャート | 刺 片 | 31.3 | 16.8 | 6.5 | 1.8 | 1と同一石材 |
| 16 | 5 | チャート | R 刺 片 | 18.4 | 32.7 | 5.1 | 2.4 | 1と同一石材 |
| 17 | 2 | チャート | 碎 片 | | | | 0.6 | 1と同一石材 |
| 18 | 6 | チャート | R 刺 片 | 50.2 | 21.7 | 8.4 | 7.9 | |

第6表 第5ブロック石器観察表

| No | 標図No | 石 材 | 分 類 | 長 | 幅 | 厚 | 重量 | 備 考 |
|----|------|-----|-----|------|------|-----|-----|-----|
| 1 | 1 | 凝灰岩 | 刺 片 | 54.1 | 24.1 | 6.7 | 8.7 | |

第7表 第6ブロック石器観察表

| No | 標図No | 石 材 | 分 類 | 長 | 幅 | 厚 | 重量 | 備 考 |
|----|------|-----|-------|------|------|------|------|--------|
| 1 | 3 | 頁 岩 | R 刺 片 | 28.8 | 18.3 | 3.2 | 1.2 | |
| 2 | 2 | メノウ | 刺 片 | 36.1 | 25.3 | 7.1 | 6.3 | |
| 3 | 4 | 頁 岩 | U 刺 片 | 31.7 | 15.1 | 6.9 | 2.5 | |
| 4 | 1 | メノウ | U 刺 片 | 77.0 | 29.1 | 10.4 | 21.2 | 1と同一石材 |

III 古墳時代

1. 上層遺構概要

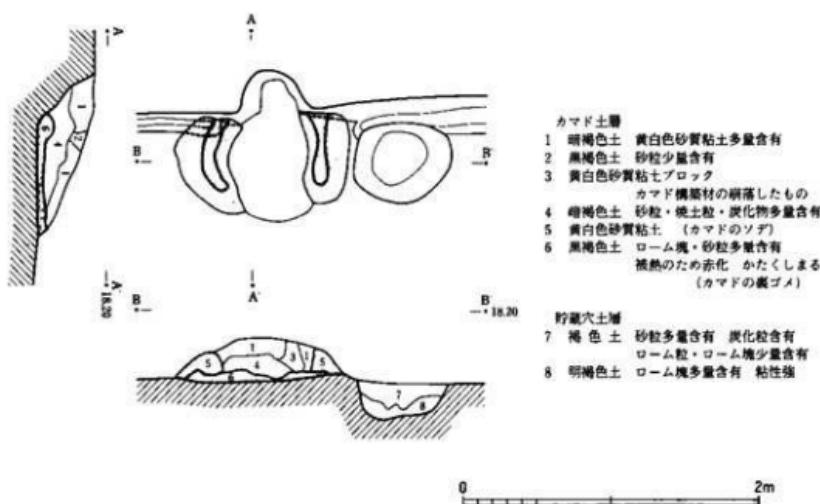
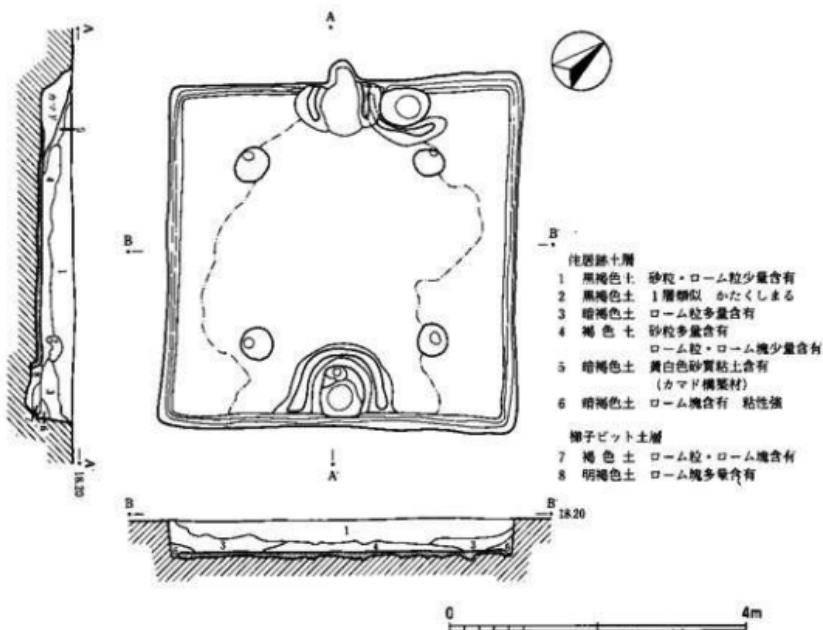
今回の調査では、上層遺構としては堅穴住居跡5軒、ピット31基を検出した。夏見台遺跡群の過去の調査の成果と比較すると、遺構密度は低いといえる。調査区は過去30年以上にわたって住宅地と使用されてきていたため、水道・ガス等の配管、ゴミ穴、便槽等の施設によって擾乱されており、遺構の検出には困難をともなった。しかし建物の基礎は比較的浅く、遺構確認面まで達していなかったため、遺構そのものの保存状態は検出時の予想に反してかなり良好であったといえる。004住居跡を除けば、幸い大きな擾乱は遺構と重複していなかった。

堅穴住居跡はいずれも古墳時代後期鬼高二期に属するものであるが、出土遺物から検討すると多少の時期差が見られる。詳細については次章で詳述する。なお、ピットについては遺物が出土せず、所属時期の判定は不可能であった。その他の時期については、縄文時代・弥生時代の遺物は全く検出されず、近世以降の遺物が表土擾乱層に混じて若干出土したのみである。

また、前章の基本層序の項で示したIII a 層についてであるが、当初新期テフラの可能性を持って調査したことはすでに述べた。下層確認調査で当層を確認した後に除去を試みたが、III b 層上面から遺構は検出されず、縄文時代以降の遺物も包含されていなかった。なお、III a 層中から先土器時代の石器が出土したことは前章でも述べたとおりである。

2. 001住居跡 (第18・19・20図、図版8・15)

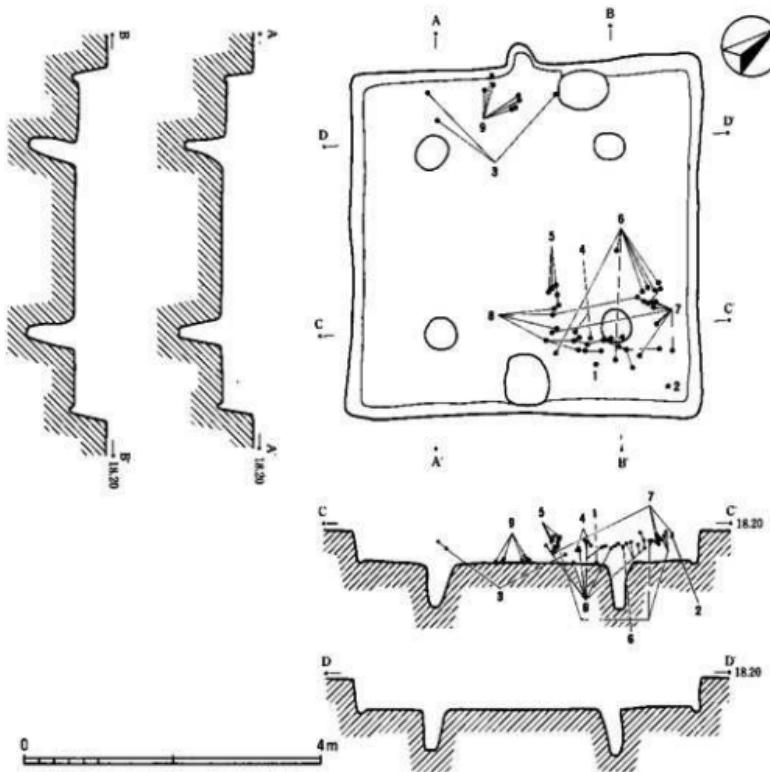
遺構 調査区の北西端に位置する。平面形は北隅がやや突出するもののほぼ正方形(4.8×4.8m)を呈し、主軸方向はN-39°-Wである。壁溝はカマド部分を除いて全周し、幅15~20cm、深さ10cm前後で大変よく遺存していた。柱穴は対角線上に4本確認でき、整然と並んでいる。深さはいずれも60~70cmでしっかり掘り込まれていた。南東壁には壁溝に重複して深さ20cmのピットが穿たれ、その周囲には土手状の高まりが認められた。この高まりの上面は、踏み固められたためか、または構築時に突き固めたためかかなり硬化していた。おそらく入口に伴う梯子ピットであろう。柱穴や梯子ピットの覆土は茶褐色を呈するしまりのないもので、床面とは明瞭に区別できた。カマドは北西壁中央より検出し、上部は崩壊しているもののソデの下部や裏ゴメ（カマド構築のために床面上に貼ったもの）は良く残っていた。火床部及びソデの内側はかなり被熱しており、赤化が進んでいた。カマドの北側には60×50cmの楕円形を呈する約40cmの掘り込みを検出した。これも梯子ピットと同様の土手状の高まりが全周しており、その上面は硬化していた。またこの高まりはカマドのソデの下まで連続しており、この部分の上面も硬化していたことから、構築時にある程度突き固めたものと思われる。覆土中には炭化物の粒子を多く含んでおり、貯蔵穴であろうと判断した。床面には全面にわたって貼床が施され



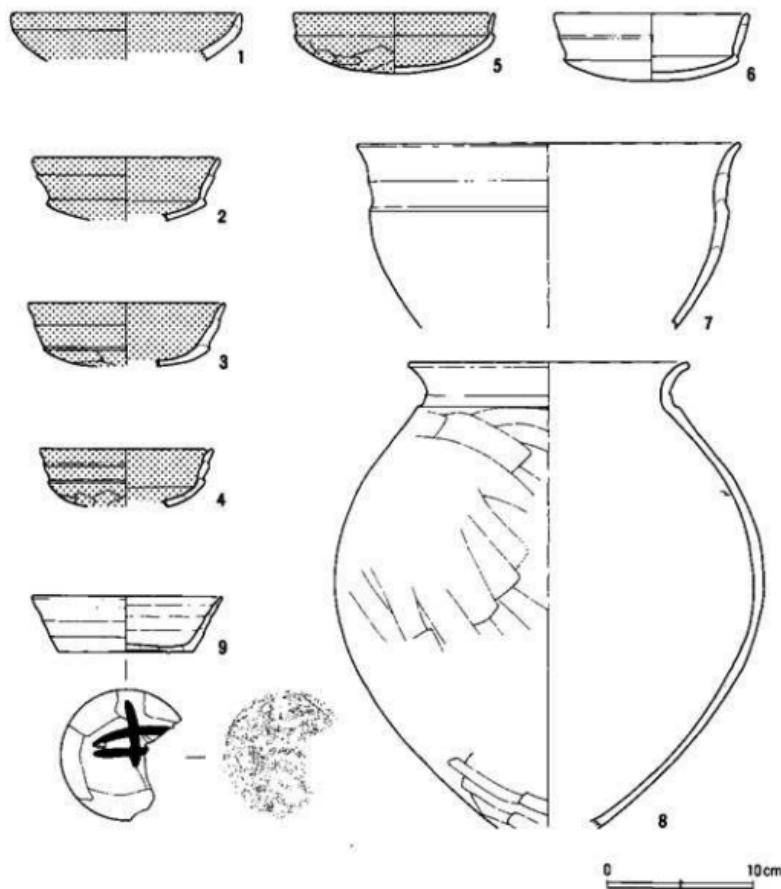
第18図 001住居跡

ており、4本の柱穴の内側から梯子ピットの周辺にかけて、かなり硬化が進んでいた。セクション図から判断すると、柱穴は貼床構築後に掘られているが、梯子ピットは構築以前に掘られたようである。また壁溝については、粗掘りの後この部分を残すように貼床を施したものと思われる。

遺物 遺物は住居跡廃絶後に流れ込んだものがほとんどと思われ、レンズ状に堆積する覆土の上層部分から多く出土している。床面からは僅かに細片が数点出土したにとどまった。図示できるものとしては、土器類の杯・椀・壺の他にロクロ土器が1点出土している。完形の土器は皆無で、いずれも復元実測である。杯は総数6点が出土している(1~6)が、整形は内面及び口縁部外面がヨコナデ、底部外面がヘラケズリまたはヘラケズリの後ナデの手法で統一されている。1~4は内外面とも黒色処理を施した痕跡が残る。推定器高はいずれも4.0~4.5cmである。7はかなり大型の椀である。整形は基本的に杯と同様であるが、底部内面はナデに



第19図 001住居跡遺物出土状況



第20図 001住居跡出土遺物

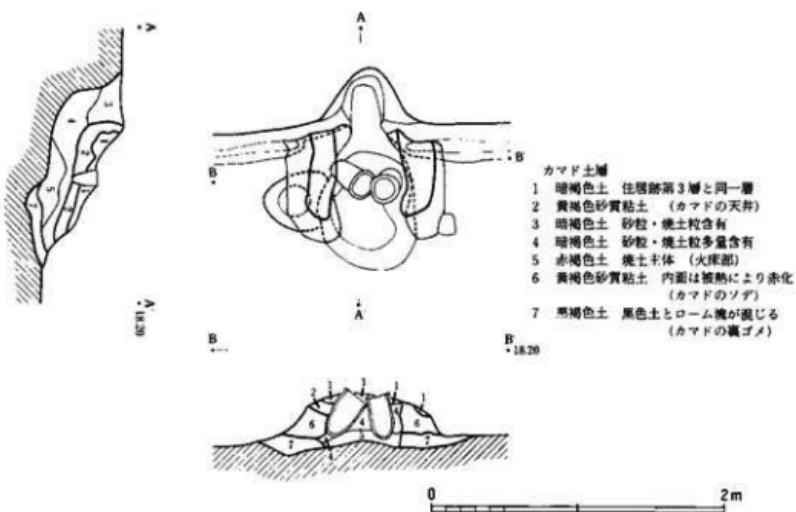
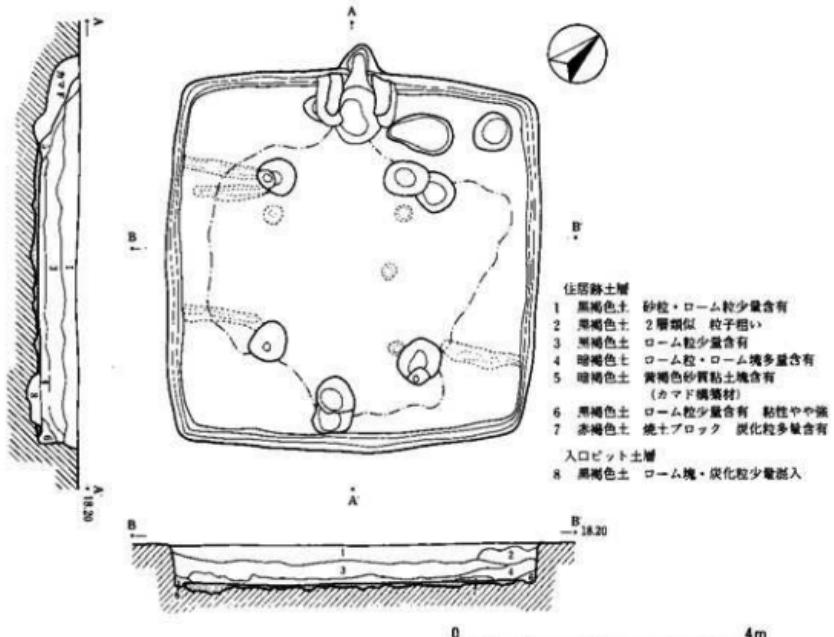
よる。胸部外面の整形手法はヘラケズリであるが、剥落が激しく、辛うじてそれであると分かること過ぎない。推定器高は15cm前後である。8の壺は破片数が少なく、復元・実測とも困難を極めた。整形は口縁部は内外面ともヨコナデ、胸部は外面がヘラケズリ、内面はナデによる。器高は32~33cmになろうか。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。9はロクロ土師器の杯である。成形は粘土紐を左巻に巻き上げており、底部は静止糸切りの後に縁辺をヘラケズリで整えている。底部外面には「キ」の字状の墨書が見られる。「廿」とも読めるが、赤外線写真による筆順の分析から「キ」と判断した。器高は3.7cm。カマド脇の床面付近から出土しているが、他の土器等から総合的にみると、流れ込みと考えるのが妥当であろう。

3. 002 住居跡 (第21・22・23図、図版9・15・16)

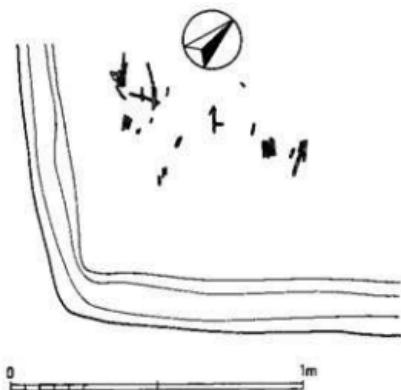
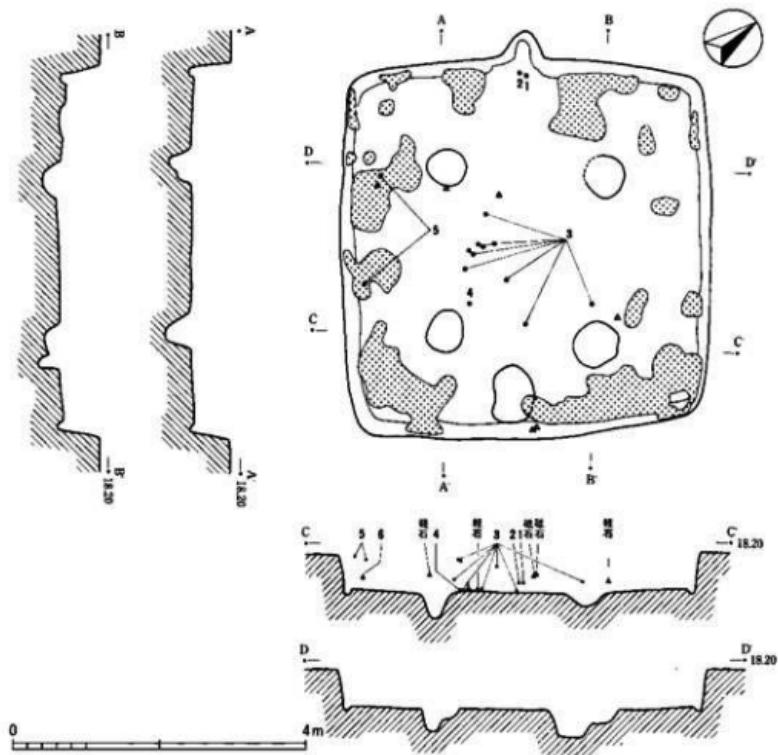
遺構 調査区西側中央、001住居跡の南東に隣接して位置する。平面形は5.1m×5.2mの僅かに南北に長い方形を呈し、隅がやや丸い。主軸方向はN-42°-Wを示し、001住居跡とほとんど同一方向である。壁溝はカマド部分を除いて全周し、幅は15cmから広いところでは25cmに及ぶ。深さは5cm内外と浅いが明瞭に確認できた。柱穴は対角線上に4本整然と認められ、深さはいずれも30cm前後と浅い。北隅の柱穴には、同様の覆土を持ち43cmとやや深いピットが重複する。南東壁中央には入口に伴う梯子ピットと見られる落込みが確認され、梯子をかける角度を考慮したためかやや斜めに段をつけて掘り込まれている。また北隅には径50cmの不整円形を呈する深さ32cmの掘り込みが認められた。貯蔵穴と思われ、黒褐色の覆土中には炭化粒が多く含まれていた。カマドは北西壁中央にある。遺構確認面の精査時にはカマドの位置が確認できず、崩壊のない良好な出土が期待された。実際には、崩落してはいたものの天井も検出することができ、掛け口には2個体の甕が掛けられた状態のまま出土した。甕の下には支脚も備えられていた。火床部及びソデの内面は大変強く被熱しており、かなり赤化していた。このカマドは、床面を掘り窪めた後にソデの基礎となる部分にロームブロックを用いて裏ゴメを施している。南側のソデ下からは深さ10cm程度の浅い落込みが検出され、当初カマドを補強するため支柱穴等の施設の存在を考えたが、覆土は裏ゴメに使用された土質と何等変わったところはなかった。またカマドの北脇には5cm程の浅い落込みがあり、灰や焼土で満たされていた。カマドから掘り出した灰や燃えかすを集めた場所であろうか。貼床は住居跡全面に施され、柱穴の内側を中心に床面の硬化が進んでいた。柱穴をはじめとする諸施設は、いずれも貼床構築後に掘り込まれたものである。この貼床を除去したところ、間仕切り溝と思われる溝4条と小ピット4基が検出された(第21図に破線で示したもの)。この小ピットのうち3基は、住居跡南隅の柱穴と組み合わせると方形に整然と並ぶ。建て替えの行われた可能性が考えられる。また、当住居跡では床面のいたるところに焼土が厚く堆積しており、火災による焼失住居と思われる。

遺物 床面に厚く堆積した焼土ブロックを除去したところ、住居跡南隅のコーナー付近から襷竹状の炭化物がまとまって検出された(第22図、図版9)。整然と並んで出土したため「スグレ状炭化物」と称して調査した。用途ははっきりしないが上屋構造もしくは生活用品の一部(敷物や間仕切りに関わるもの)であることは疑いのないところである。樹種については分析をパリノサーヴェイ株式会社に委託し、タケ亜科の一類であることが判明している。詳細については別章に譲る。

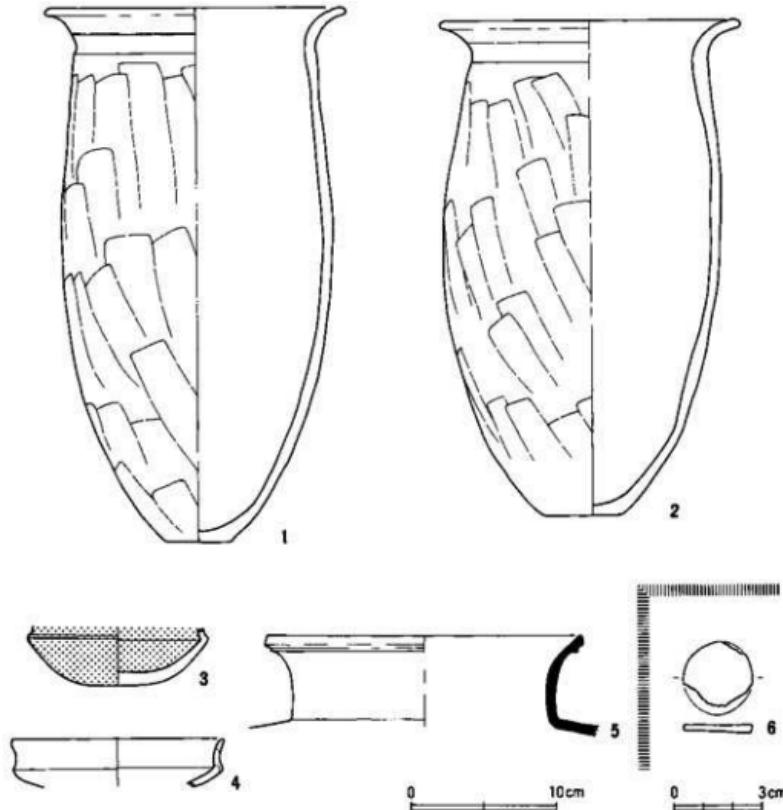
遺物としては、まず先述のカマド掛け口より出土した甕2点があげられる(1, 2)。古墳時代後期鬼高式の長胴甕で、一般に武藏型と呼称されるものに近い形態を示す。千葉県では東京湾沿岸を中心に分布し、千葉市幕張町に所在する上の台遺跡でまとめて出土している。このあたりが東限となるのかもしれない。整形技法は、2点とも口縁部がヨコナデで内面はナデ、



第21図 002住居跡



第22図 002住居跡遺物及び炭化物出土状況



第23図 002住居跡出土遺物

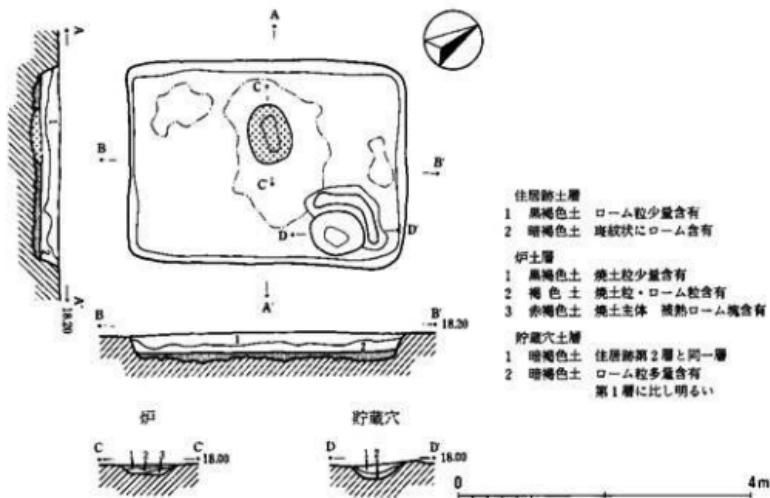
外面はヘラケズリが用いられる。器高は1が36.8cm、2が33.9cmを測る。色調はどちらも赤橙色を呈し焼成は良好であるが、胸部下半から底部にかけては2次焼成により脆くなっている。壺の他には土師器壺2点と須恵器壺1点を図示した。3は口縁部を欠損する杯で、内外面に黒色処理の痕跡が残る。整形は、口縁部はヨコナデ、底部外面はヘラケズリの後ナデ、底部内面はナデによる。4は底部を欠損する杯で、小破片による復元実測である。色調は橙色を呈し、焼成はあまり良くない。整形は内面及び口縁部外面がヨコナデ、底部外面がヘラケズリの後ナデである。5は須恵器の壺で、確認面直下の覆土上層からの出土で明らかに流れ込みの遺物である。胸部はタタキにより整形されており、非常に丁寧なつくりである。今回の調査では、須恵器はこの1点が出土したのみである。

以上の土器の他に滑石製円板1点、軽石3点、砥石2点が出土している。6に示したものが滑石製円板で、有孔円板の未製品または欠損品と思われる。その他は図示できなかったが、軽石はいずれも径2cm前後の小さなもので、用途ははっきりしない。砥石は砂岩の礫を使用したもので、わずかに擦痕が残る程度である。被熱のため赤化している。

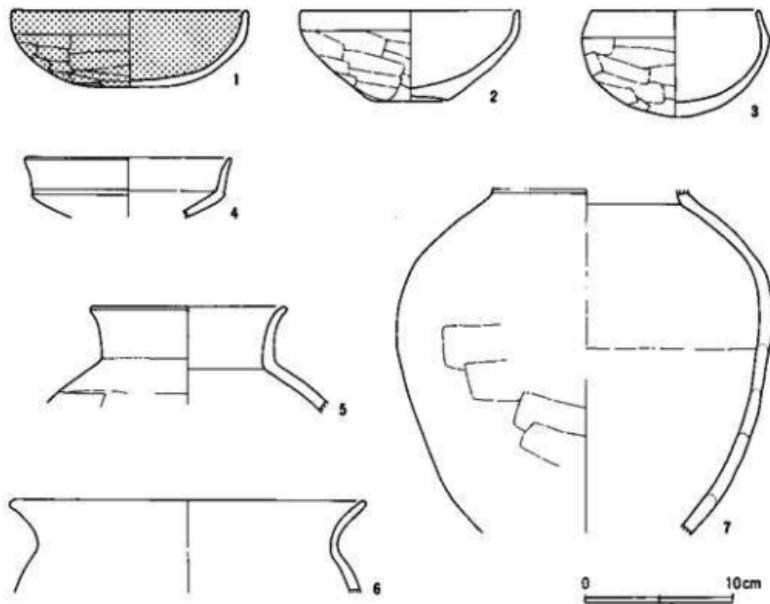
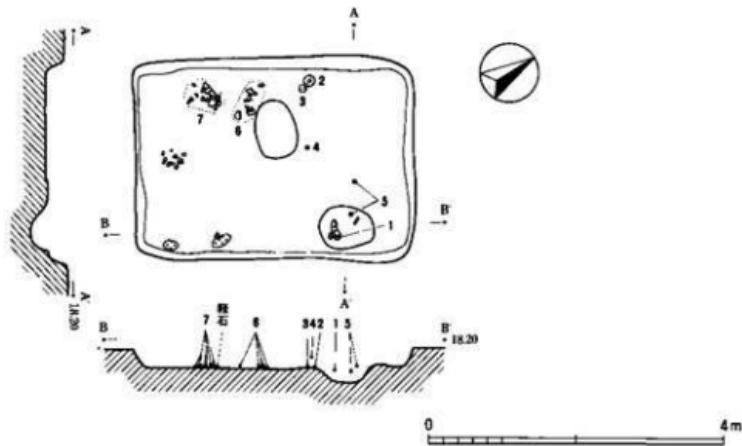
4. 003住居跡 (第24・25図、図版10・11・16)

遺構 調査区南側の範囲内ぎりぎり、やや北寄りに位置する。辛うじて調査範囲内で全面を検出することが出来た。平面形は3.8×2.4mの楕円長方形を呈し、主軸方向はN-26°-Wである。住居跡中央やや北西寄りに炉を持ち、壁溝や柱穴といった施設は確認できなかった。炉の他には、住居跡東隅付近に貯蔵穴と思われる平面橢円形(70×50cm)の深さ25cmのピットを検出したに過ぎない。周辺には001住居跡に見られたような土手状の高まりが約半周回っているのが確認され、その上面も同様に硬化していた。覆土中には遺物が多く包含されていた。住居跡全面にわたって貼床が施されており、床面は炉の周辺と北隅コーナー付近、及び北東壁付近の一部が踏み締められて硬化している。今回検出した5軒の住居跡の中では若干様相が異なる。

遺物 住居の規模の割に遺物は豊富で、図示できるものだけでも7点ある。特に2と3は床面上より完形で出土したもので、6や7も床面上より押し潰されたように出土した。1も貯蔵穴内から押し潰された状態で出土した。いずれも明らかに当住居跡に帰属することを示



第24図 003住居跡



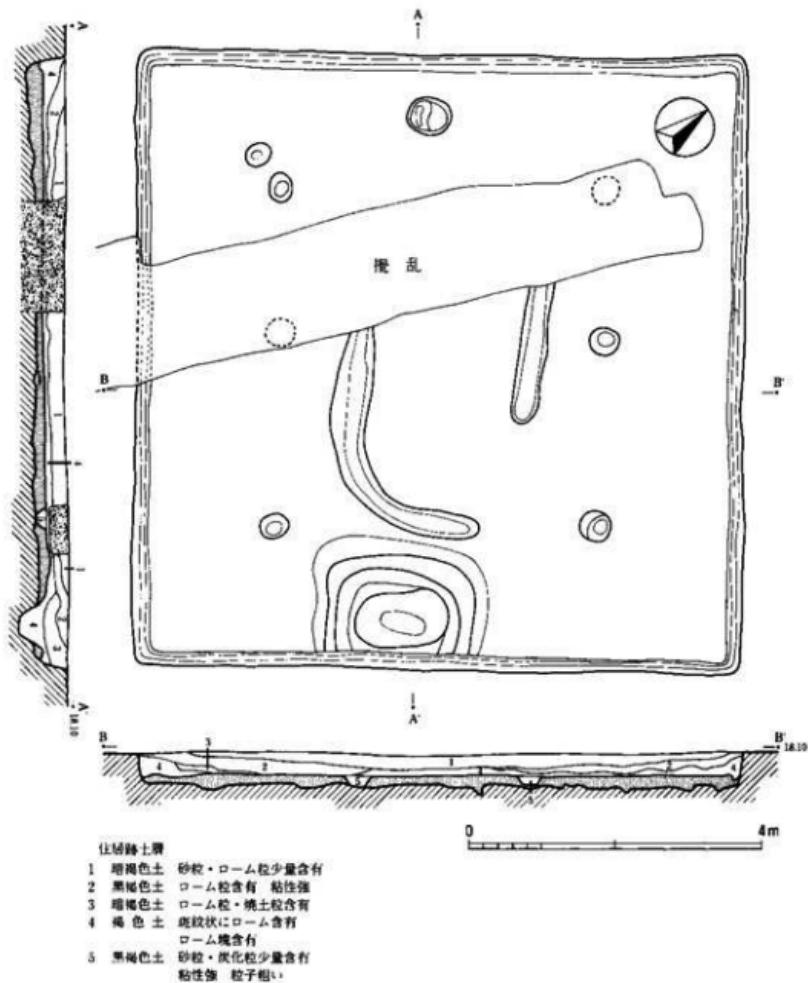
第25図 003住居跡出土状況及び遺物

す出土状況であった。1は外面ヘラケズリ、口縁部から内面は丁寧なヨコナデによって整形され、全面に黒色処理が施された杯である。2は外面ヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、内面は放射状のヘラミガキによって整形された杯で、底部は丁寧なナデによってやや抉れ、上げ底状を呈する。他の遺物と比較してやや古い様相をもっている。3は丸底の椀である。外面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、内面はナデによる。胎土には大粒の砂粒を多量含み、粗く脆い。4は覆土上層から出土したもので、明らかに流れ込んだものである。内面及び口縁部外面はヨコナデ、底部外面はヘラケズリ後ナデによって整形する。外面の稜の部分はかなり綿密にヨコナデを施したためか沈線状になる。二次焼成を受けて赤化している。高杯である可能性もあるが脚部が残存しないため明確ではない。5は甕の口縁部破片である。土圧によりかなり歪みが生じている。口縁部はヨコナデ、胴部外面はヘラケズリ、胴部内面は粗いヘラナデによる。6は甕の口縁部である。同一個体と思われる胴部破片が數点出土しているが、全容を知るには至らなかった。5と同様に、土圧による歪みが生じている。整形も5とほぼ同様であるが、外面はヘラケズリの後にナデされている。7は口縁部と底部を欠損する甕である。外面はヘラケズリの後に粗いナデを施しているが、部分的にナデ残しが見られる。内面はヘラナデによるが、こちらもかなり雜に行われており一部に輪積痕が残る。

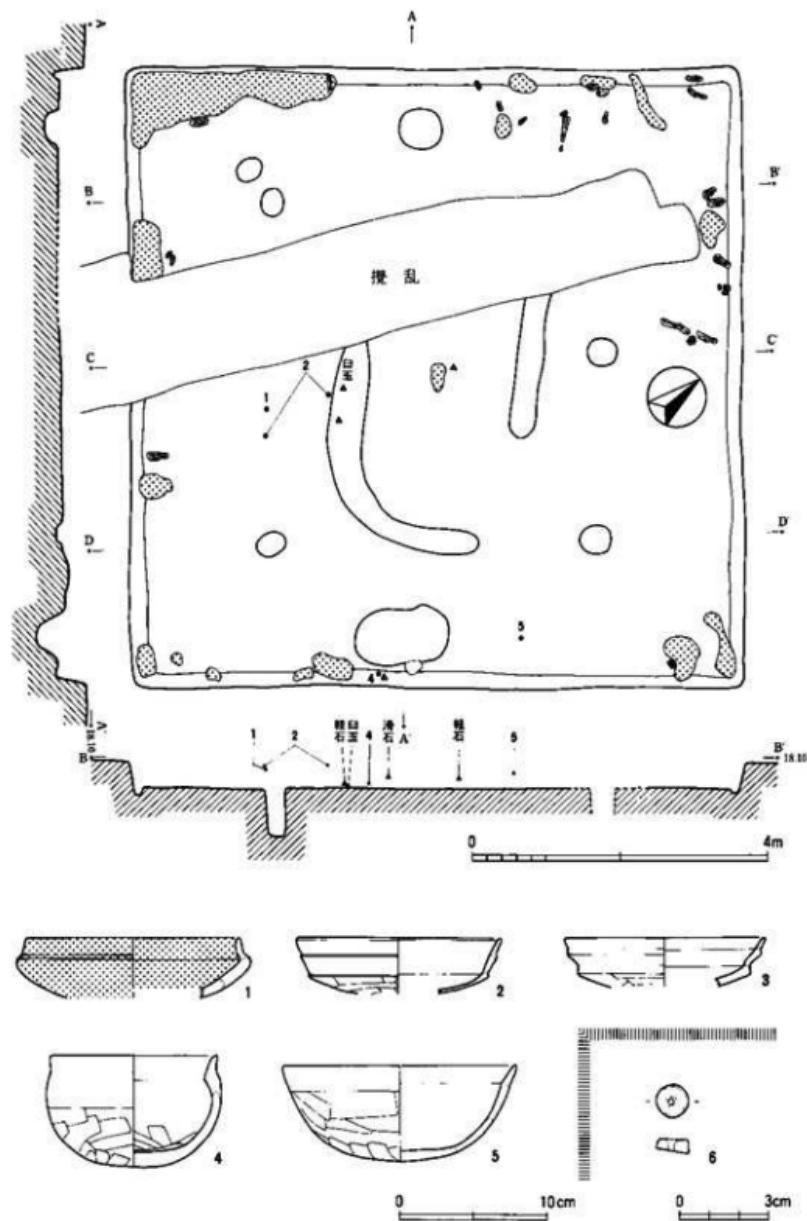
5. 004 住居跡 (第26・27図、図版11・16)

造構 調査区の中央やや南よりに位置する。8.3×8.3mの正方形の平面形を持つ、大形住居である。南西壁からかなりの範囲にわたって攢乱されており、調査に支障を来たした。壁溝は幅15~20cm、深さ5~8cmのものが全周する。柱穴は攢乱によって破壊されたものもあるが、現存する柱穴の配置から6本あったと推測できる。カマドは検出されず、また、炉も攢乱により破壊された可能性もあるが確認できなかった。南東壁中央やや南よりには1.2×0.7mの不整梢円形のプランを持つ深さ約30cmの掘り込みを検出した。周囲には高さ10cmとかなり顯著な土手状の高まりが廻っており、上面はかなり硬化している。位置的には入口に伴う梯子ピットと考えられるが、規模的にやや大きすぎる感もある。夏見台遺跡の過去の調査ではこの様な施設は貯蔵穴と認識しているようである。壁外に張り出している例も多い。この掘り込みに相対する北西壁際の中央付近には深さ5~10cm程の浅いピットが認められる。位置的にはカマドの痕跡かとも考えられるが、付近の住居跡覆土中には焼土や砂質粘土は含まれていなかった。西隅柱穴の壁寄りにもピットが存在するが、こちらの性格も不明である。そのほかに幅30~50cm、深さ15cm前後の溝が2条、床面に掘り込まれている。間仕切り溝とも考えられるがはつきりしない。覆土は粘性が強く粒子の粗い黒褐色土であり、セクションから後世の攢乱でないことは明かである。住居跡には全面にわたって貼床が施され、柱穴等の諸施設は貼床構築後に掘削されている。床面には先述の土手状に高まった部分以外には特に硬化した部分は認められず、

全面的に軟質であった。床面には壁際を中心に焼土ブロックや炭化材が検出されたが、火災による焼失住居と認定できるほどの量ではない。ある程度上屋を解体した後に火を放ったものであろうか。



第26図 004住居跡



第27図 004住居跡出土状況及び遺物

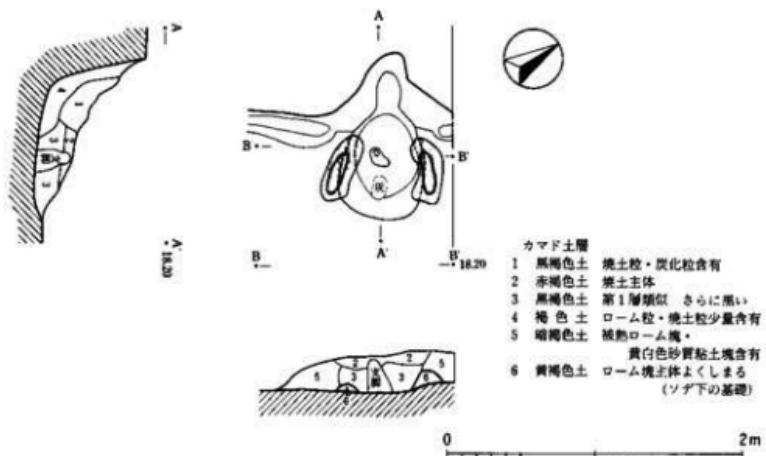
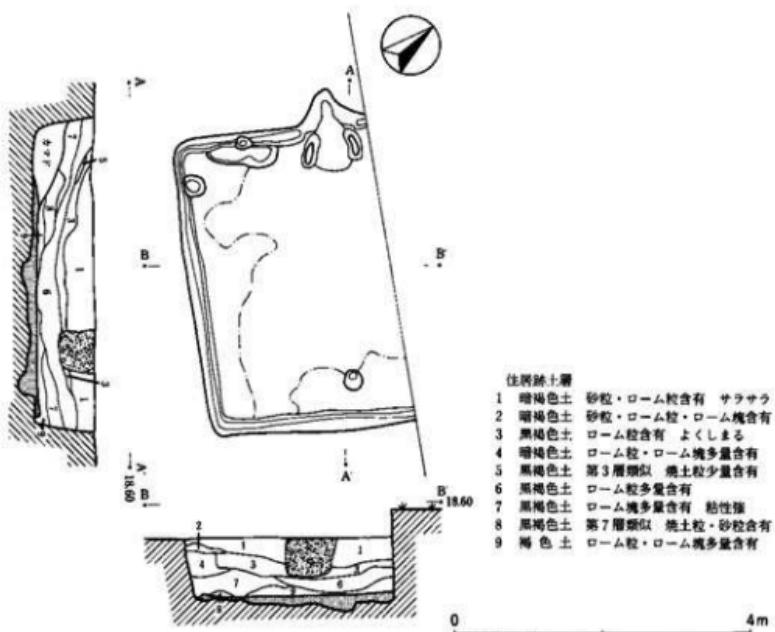
遺物 遺物は住居跡の規模に比して少なく、杯3点と椀2点を図示した。1は底部を欠損する杯で、内面から口縁部外面はヨコナデ、底部外面はヘラケズリの後ナデで整形し、全面黒色処理を施している。2及び3は内面から口縁部外面をヨコナデ、底部外面はヘラケズリの杯で、いずれも底部を欠損する破片の復元実測である。3点とも焼成は良好であった。4は丸底の椀である。口縁部内外面と胸部上半をヨコナデ、底部は内外面ともヘラケズリで整形される。色調は暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。5は口縁が開く椀である。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリで整形され、かなり薄手である。暗褐色を呈し、焼成は良好である。

上記の土器の他に、滑石製白玉1点、加工前の滑石1点、軽石2点が出土している。6は滑石製の白玉である。今回の調査での出土はこの1点であるが、過去の調査では白玉の製作跡(玉造工房)と思われる住居跡も報告されている。

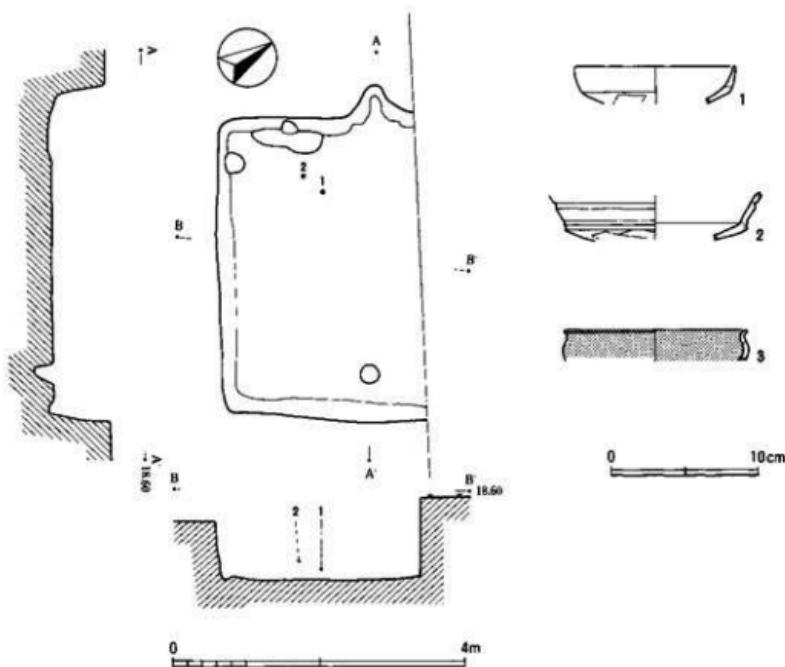
6. 005住居跡 (第28・29図、図版11・16)

遺構 調査区の東側、調査範囲から除外した道路部分にかかって存在するため約1/2のみの調査となった。平面形は4.1×推定4.3mの方形を呈し、掘り込みは0.8mとかなり深い。調査範囲内のみにおいては幅20cm前後、深さ5~10cmの壁溝が全周し、主柱穴と思われるピットは確認できなかった。南東壁中央付近には梯子ピットと思われる落込みがあり、やや斜めに掘り込まれている。住居跡の西隅コーナー付近では補助柱穴と思われるピットを2基、深さ5cm前後の、性格不明の浅い落ち込みを1ヶ所検出した。カマドは完全に破壊されており、焼土はややまとまって確認したものの、構築材である黄白色砂質粘土はブロック状に検出したに過ぎなかった。ソデがあったと思われる部分にロームを突き固めた土手状のものが残っており、カマド構築の基礎にしたものと推測される。火床部と思われる部分には支脚が備えられており、また小規模な灰のブロックも検出された。床面は全面にわたって貼床が施されている。かなり厚く貼っており、最も厚い部分は40cmにも及んでいる。床面は、壁際を除いて広い範囲にわたって硬化している。

遺物 遺物の出土は僅かであった。辛うじて復元実測により図示できるのは杯3点である。1は外面に稜をもつ小形の杯である。整形は内面から口縁部外面はヨコナデ、底部外面はヘラケズリによる。2は口縁部及び底部を欠損する破片で、整形は1と同様である。口縁部外面は意識的に明確な稜を作出している。3は覆土上層で一括して取り上げた遺物に混入していたものである。口縁部外面上半と残存部の内面全面にわたって赤色塗彩が施される。口縁部が「S」字状を呈する、いわゆる比企型と称される資料である。



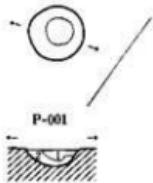
第28図 005住居跡



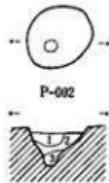
第29図 005住居跡出土状況及び遺物

7. ピット (第30~33図)

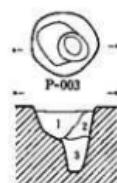
ピットとして調査した遺構は総数31基にのぼる。円形ないしは楕円形のプランを呈するが、径は30cmから大きなものでは1.2mに及び、深さも15~45cmとまちまちで画一性は認められなかった。また掘立柱建物跡や壠列といった遺構を示す位置関係を把握できるものもなかった。覆土はP-006やP-028のように柱痕と思われるものが残存する場合もあるが、それ以外はすべて2~4層に分層されるものの性格を示すような特徴的な堆積は見られず、性格は不明と言わざるを得ない。遺物の出土も見られなかった。なお、セクションポイントのレベルは、いずれも18.20mである。



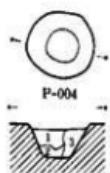
- P-001
1 暗褐色土 ローム粒含有 粘性強
2 暗褐色土 ロームブロック多量含有



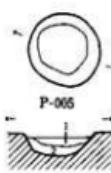
- P-002
1 暗褐色土 ローム粒少量含有
2 褐色土 ローム粒及びローム
ブロック多量含有
3 暗褐色土 斑文状にローム含有



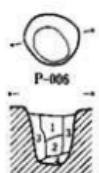
- P-003
1 暗褐色土 ローム粒少量含有
2 暗褐色土 斑文状にローム含有
3 黑褐色土 ローム粒含有 粘性強



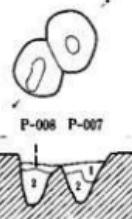
- P-004
1 暗褐色土 ローム粒少量含有
2 黑褐色土 斑文状にローム含有
3 棕色土 砂粒少量含有 しまる



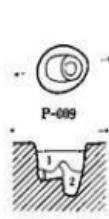
- P-005
1 黑褐色土 ローム粒含有
2 褐色土 斑文状にローム含有



- P-006
1 黑褐色土 ローム粒少量含有
2 黑褐色土 第1層類似 やや粗い
3 暗褐色土 斑文状にローム含有
4 暗褐色土 ロームブロック多量含有
粘性強



- P-007
1 暗褐色土 ローム粒少量含有
2 黑褐色土 ローム粒・砂粒含有
粘性強
P-008
1 暗褐色土 ローム粒・砂質含有
2 暗褐色土 ローム粒多量含有



- P-009
1 暗褐色土 ローム粒・砂粒含有
2 暗褐色土 斑文状にローム含有
3 暗褐色土 ロームブロック多量含有



第30図 ピット(1)



P-010



- 1 暗褐色土 ローム粒少量含有
2 暗褐色土 ローム粒多量含有
3 黄色土 ロームブロック含有
粘性強



P-011



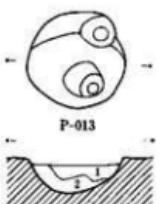
- 1 暗褐色土 ローム粒多量含有
砂粒少量含有
2 黄色土 ローム粒含有 粘性強



P-012



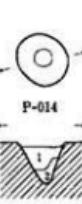
- 1 黑褐色土 斑文状にローム含有
粘性強
2 黄色土 ローム粒多量含有



P-013



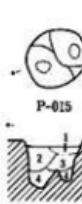
- 1 暗褐色土 ローム粒・砂粒含有
2 暗褐色土 ローム粒多量含有



P-014



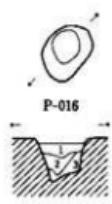
- 1 黑褐色土 斑文状にローム含有
2 黑褐色土 ロームブロック少量含有



P-015



- 1 黑褐色土 ローム粒少量含有
2 暗褐色土 斑文状にローム含有
3 暗褐色土 ロームブロック含有
粘性強
4 暗褐色土 第3層類似 やや暗い



P-016



- 1 黑褐色土 斑文状にローム含有
2 黑褐色土 第1層類似 ややしまる
3 暗褐色土 ロームブロック少量含有



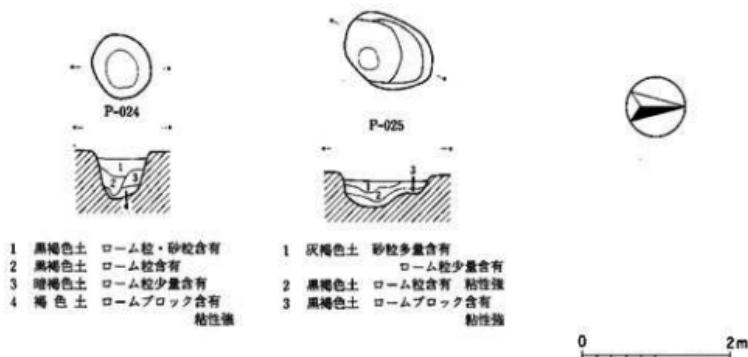
P-017



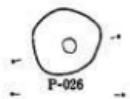
- 1 暗褐色土 ローム粒少量含有
2 暗褐色土 斑文状にローム含有
3 暗褐色土 ロームブロック含有
粘性強

0 2m

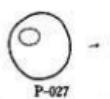
第31図 ピット(2)



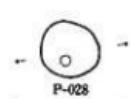
第32図 ピット(3)



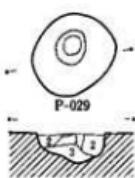
- 1 黒褐色土 ロームブロック少量含有
2 暗褐色土 第1層類似 しまる
3 黒褐色土 ローム粒含有 粘性強



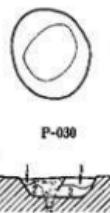
- 1 黒褐色土 ローム粒少量含有
2 暗褐色土 第1層類似 しまる



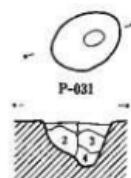
- 1 黒褐色土 砂粒多量含有
2 暗褐色土 ロームブロック含有 粘性強
3 暗褐色土 第1層類似 しまる



- 1 黒褐色土 ローム粒・砂粒含有
2 暗褐色土 ローム粒多量含有
3 暗褐色土 ローム粒少量含有



- 1 暗褐色土 ローム粒少量含有
2 暗褐色土 ローム粒含有 粘性強



- 1 黒褐色土 斑文状にローム含有
2 黒褐色土 ローム粒少量含有
3 黒褐色土 ローム粒含有 しまる
4 暗褐色土 ローム粒多量含有



0 2m

第33図 ピット(4)

IV まとめ

1. 各住居跡の時期と特徴

今回調査した5軒の住居跡は、いずれも古墳時代後期鬼高式期に属するものであるが、その範囲内で若干の時期差が認められる。001住居跡の床面から出土したロクロ土師器は8世紀代の所産と思われる。また、覆土上層から出土している遺物はいずれも古墳時代後期の所産であり、同時期のものは破片ではあるが床面直上からも出土している。ロクロ土師器は流れ込みのものと考えられるが、やや新しい時期に属するものと考えたい。

002住居跡は形態的には001住居跡と非常に近似している。遺物は鬼高式の典型とされるものが出土しており、当該時期として差し支えなかろう。

003住居跡はカマドを持たない小規模な住居であり、その形態からもやや古い時期のものと考えられる。また、2の杯は和泉式に属するものである。これらの要素から調査段階では和泉式期の住居として扱っていたが、他の遺物の状況等も鑑み、鬼高式期の古い時期の住居として考えたい。なお、夏見台遺跡群に於ける和泉式期の遺物の検出は今回が最初となった。

004住居跡は1辺が8.3mとたいへん大形のもので、しかもカマドを備えていない。柱穴は6本と思われ、加えて床面も比較的軟弱であり特殊な様相を示している。等跡に近似する例は過去の調査でも数軒検出されている（夏見台1次15号住居跡、19号住居跡等）が、玉造工房であったり、カマドを2基備えていたり特殊な遺構が多いようである。また、同規模の大形住居に共通する点として、南壁中央付近に張り出し部を持ち貯蔵穴と思われるピットが存在することが挙げられる。等跡も張り出し部は持たないものの概ね同規模のピットが存在する。こうした住居跡の位置づけは重要な課題となろう。遺物としては鬼高式に比定されるもののみが出土している。

005住居跡は約1/2が調査区外に存在するため全貌は明らかにできなかったが、001や002住居跡と比較してやや小規模であり、柱穴も存在しないことから、形態的にはやや新しい様相が看取される。しかし遺物はわずかしか出土しておらず、断定はできない。なお、比企型の杯が出土しているが、当地域は主要な分布圏に属しておらず、夏見台遺跡群内でもおそらく最初の検出例であろう。

2. 夏見台遺跡群内の集落の移動

夏見台遺跡群では、過去にも数次にわたる調査が実施されており、その成果が公にされてきている。既に報告されているものとしては夏見台遺跡（1次～4次）、夏見大塚遺跡（1次～6次）、八栄北遺跡があげられる。また、船橋市史では船橋中学校校庭遺跡、笠塚古墳等夏見台遺跡群内に所在する遺跡が紹介されている。

八栄北遺跡は夏見台遺跡群の北東端に位置し、市立夏見台小学校建設に伴って昭和47年に調査された。縄文時代前期（黒浜式主体）竪穴住居跡9軒、古墳時代後期竪穴住居跡7軒、奈良時代以降の竪穴住居跡1軒の計17軒が検出されている。

夏見台遺跡は1次～4次まで計4地点が報告されているが、いずれも夏見台地の東側縁辺部に位置する。第1次調査は昭和41年末～昭和42年初めにかけて、公共の宅地開発にともなって行われ、古墳時代後期の竪穴住居跡15軒、平安時代の竪穴住居跡6軒が検出されている。特に4号住居跡からは大量の臼玉及びその未製品や原石と思われる石塊が出土しており、他の住居との構造の相違も鑑みて玉造工房跡であると推定されている。第2次調査は個人の住宅建設に伴って昭和49年に実施された。第1次調査地点の南約200mに位置する。遺構は古墳時代後期の竪穴住居跡が13軒検出されており、7号住居跡は第1次調査4号住居跡と同様の玉造工房跡である。そのほかに棚列状にピットの並んだ溝状遺構が確認されている。第3次調査は電電公社（現NTT）の宿舎建設に伴って昭和50年に実施されたもので、第2次調査地点より更に南へ約100mの地点である。弥生時代の竪穴住居跡9軒、古墳時代前期1軒、後期12軒、奈良時代4軒が検出されている。また第3次調査では調査区への進入路についても調査が行われ、第3次-IIとして報告されている。幅の狭い路線調査のため全貌が明らかになった遺構は無いが、古墳時代後期の竪穴住居跡9軒、平安時代1軒、時期不明2軒と溝状遺構4条が検出されている。2号住居跡では大量の臼玉やその未製品、欠損品が出土しており、第1次4号住居跡、第2次7号住居跡と同様の遺構である。工具のひとつと思われる砥石も出土している。第4次調査は昭和55年に実施され、古墳時代後期竪穴住居跡9軒、平安時代6軒が検出されている。また、報告書の「まとめ」の項では、夏見台地上の遺跡の変遷、滑石製石模造品の製作工程等総合的な検討が行われている。調査地点は夏見台地東端の肩の部分に立地する。

夏見台地南端部分の遺跡は統称して夏見大塚遺跡と呼ばれており、これまでに6次にわたる調査が行われているが、いずれも小規模なものである。第1次調査は昭和47年に実施され、弥生時代竪穴住居跡5軒、平安時代竪穴住居跡1軒が検出されている。翌昭和48年に夏見台地南端の肩の部分で実施された第2次調査では、弥生時代12軒、古墳時代後期1軒、平安時代2軒が検出された。ここは船橋中学校校庭と非常に近接しており同一集落の可能性が高いが、船橋中学校校庭遺跡については明確な資料が残されていないため断定できない。ただし船橋中学校校庭遺跡が夏見大塚遺跡と呼ばれる部分の一部であることは疑いの無いところであろう。また同年には第3次調査も実施されており、弥生時代1軒、平安時代7軒が検出されている。やや間を置いた昭和53年の第4次調査では奈良・平安時代の竪穴住居跡5軒と掘立柱建物跡1棟、昭和55年の第5次調査では弥生時代2軒と奈良・平安時代3軒、昭和60年の第6次調査では平安時代のものが2軒、それぞれ検出されている。第4次調査5号住居跡からは青銅製の帶金具が出土しており特筆される。

これらの他に、船橋市教育委員会による確認調査が実施されたものの遺構が検出されず、遺跡として認定されなかった地点が數カ所ある。これらは概ね台地の中央部に集中しており、集落は台地縁辺部を中心に形成されたのかもしれない。今回の4カ月の調査期間中にも船橋市教育委員会による確認調査が2地点で行われ、それぞれ遺構の検出を見たようである。うち1地点は今回の調査区の北方約300mの位置にあたり、同様の立地条件を示している。ここでも古墳時代後期の住居跡が検出されたようである。

これらの成果を総合して、夏見台地上の遺跡の分布について検討してみたい。

縄文時代に属する遺構は、今のところ八栄北遺跡で検出された9軒のみに限られる。前期黒浜式期のものである。分布調査で確認された夏見台西遺跡も縄文時代前期と紹介されている。その他の時期については散布地さえも発見されていない。

弥生時代遺構は夏見大塚遺跡を中心とする台地南端部で多く検出されており、総数20軒に及ぶ。夏見台第3次調査でも数軒検出されており、やや東側にも展開するようである。中期宮ノ台式の様相を持つものも検出されているが、ほとんどは後期久ガ原式期に属する。

夏見台遺跡群内で最も検出例の多いのは古墳時代であるが、夏見台第3次調査で前期五領式期の住居跡が1軒検出されている他は、全て後期鬼高式期の所産である。その総数は66軒に及ぶ。また、夏見台第1次4号住居跡、2次7号住居跡、4次2号住居跡等、臼玉をはじめとする滑石製品や未製品を大量に出土する遺構が検出されており、加工用工具を伴っている例もある。玉造工房跡として位置づけられている。夏見台第4次調査の報告では、滑石製品の製作工程について論究している。これまで古墳時代の集落は台地東側を中心に分布し、南端部から台地西側には見られないと考えられてきたが、今回の調査の結果、台地の西側にも該期の集落が展開することが明らかになった。なお、和泉式の遺構は検出例がないが、今回003住居跡から出土した土器が、その存在の可能性を示唆している。

奈良・平安時代の遺構は、台地の南側及び東側に偏って分布しており、総数32軒を数える。軒数は古墳時代後期に次いで多く、かなり広い範囲に分布するようである。土器型式の認識の差からであろうか、旧來真間式と呼ばれてきたものは奈良時代の土器とするのが一般的であるが、夏見台第3次調査の報告で真間式とされたものは古墳時代後期に位置づけられており、この範疇には入らない。

さらに新しい時代では、伊勢神宮神宮文庫所蔵「神宮雜書」に「建久三年八月日、二所太神宮神主依職事仰並次第事知注進神領子細事」という項が見られ、夏見地区を含む周辺地域は「船橋御厨」または「夏見御厨」と呼ばれる伊勢神宮領であったことが記されている。なお、中世には台地東端に夏見城跡が営まれたとされている。近世には畠地として利用されていたようで、耕作土中からは泥メンコ等が出土する。いずれにしても、夏見台地が古代からの人間の足跡が連續と残されている大遺跡であることは間違いない。

V スダレ状炭化物分析結果

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

夏見台遺跡は、長津川に面した台地肩部に立地する。今回の発掘調査区（約2000m²）では、古墳時代の住居址が検出されている。そのうち、002住居址（古墳時代後期鬼高式期）は焼失住居であり、その南隅で植物体の炭化物（スダレ状にみられる）が焼土ブロックの直下、床面直上に張り付くような状態で検出された。外見的特徴は、タケに類似する。発掘担当者は、この炭化物を住居上屋材の一部と推定している。

今回の分析調査では、検出された炭化物の種類を推定することを目的とした。当初、予察的に灰像分析を実施したが、特徴的な灰像が得られず、種類の推定は困難であった。そのため、走査型電子顕微鏡での観察を行い、これを補った。

1. 試 料

試料は、発掘担当者が炭化物の分析を考慮して選択した炭化物の3点である。

2. 分析手法

1) 灰像分析

試料を過酸化水素水（H₂O₂）・塩酸（HCl）処理→乾燥→灰化（電気炉・500°C・1時間）の順に処理する。灰化試料をプレパラートに封入し、葉部表皮細胞の並び方から、イネ科植物の種類を同定する。

2) 走査型電子顕微鏡での観察

試料の横断面の割断面を作製、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。また、試料の電子顕微鏡写真も撮影した。

3. 観察結果と推定される種類

試料の灰像には植物繊維が認められるものの、特徴的な組織が認められない。一方、走査型電子顕微鏡での観察により、3点の試料は維管束が基本組織の中に散在する不齊中心柱をもつ特徴が認められた。この特徴と試料の肉眼的観察により、この炭化物はイネ科タケ亜科の一種（Gramineae subfam. Bambusoideae sp.）に同定できる。

タケ亜科にはタケ類・ササ類・バンブー類が属し、その中には日本に自生していた種類や栽培によって各地に広まった種類がある（室井、1960）。ただし、解剖学的特徴ではこれらの種類

を区別できないために、この炭化物がどの種類に当たるかの判別はつかない。

引用文献

室井 錠 「竹籠の生態を中心とした分布」『富士竹類植物館報告』p.103-122. 1960

第9表 スダレ状炭化物分析結果

| サンプル番号 | 資料番号 | 出土遺物 | 試料の状態 | 種類 |
|--------|------|------|--------------------------|----------------|
| ① | 0120 | 002号 | タケに類似する植物体炭化物（スダレ状にみられる） | イネ科タケ 亞科の一種 |
| ② | 0121 | 住居址 | | |
| ③ | 0122 | (南隅) | | |

参考文献

- 下津谷達男「夏見台」—古墳時代集落址・工房址の発掘調査— 船橋市教育委員会 1967
佐藤 武雄「夏見台（第2次）」—弥生時代及び古墳時代の集落址の調査— 船橋市教育委員会 1976
下津谷達男「夏見台（第3次）」—弥生時代及び古墳時代の集落址の調査— 夏見台遺跡第3次発掘調査団 1976
金刺 伸吾「夏見台（第3次-II）」 船橋市遺跡調査会 1982
柳原 松司「夏見台<第4次>」 船橋市夏見台<第4次>遺跡調査団 1981
八幡 一郎「八栄北」—繩文時代前期・古墳時代後期の集落址の発掘調査— 船橋市教育委員会 1974
八幡 一郎「夏見大塚遺跡」—夏見台地における弥生時代・奈良平安時代集落址の調査— 船橋市教育委員会 1975
八幡 一郎「夏見大塚遺跡（第2次）」 船橋市教育委員会 1976
大場 碧雄「夏見大塚遺跡（第3次）」 船橋市教育委員会 1976
下津谷達男「夏見大塚（第4次）」 夏見大塚遺跡第4次発掘調査団 1989
田川 良「夏見大塚遺跡（第5次調査）」 夏見大塚遺跡（第5次）発掘調査団 船橋市教育委員会 1981
岡崎 文喜「夏見大塚—第6次調査報告—」 船橋市遺跡調査会 1989

写 真 図 版



夏見台遺跡周辺航空写真-1 (昭和42年 1:2,500)



夏見台遺跡周辺航空写真-2 (平成2年 1:2,500)



1 調査区（北西半分）近景



2 調査区（南東半分）近景



1 夏見台地遠景（南西 船橋市北本町から）



2 夏見台地遠景（東 船橋市米ヶ崎町から）



1 立川ローム基本層序



2 第1ブロック出土状況



3 第2ブロック出土状況



1 第3ブロック出土状況



2 第4ブロック出土状況



3 第5ブロックVII層
出土状況



1 第5ブロック IXa-c層
出土状況



2 第6ブロック出土状況



3 下層調査風景



1 001 住居跡全景



2 001 住居跡カマド



3 上層調査風景



1 002住居跡全景



2 002住居跡カマド出土状況



3 002住居跡スダレ状炭化物
出土状況



1 003住居跡全景



2 003住居跡出土状况



3 003住居跡出土状况
(部分)



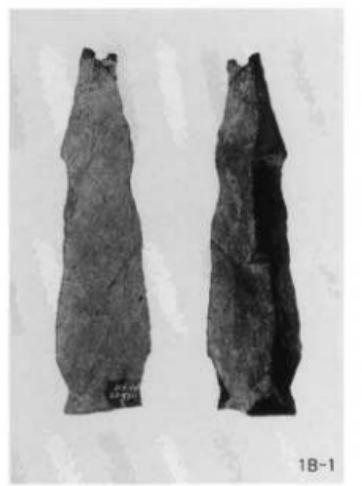
1 003住居跡
貯藏穴出土状況



2 004住居跡全景



3 005住居跡全景

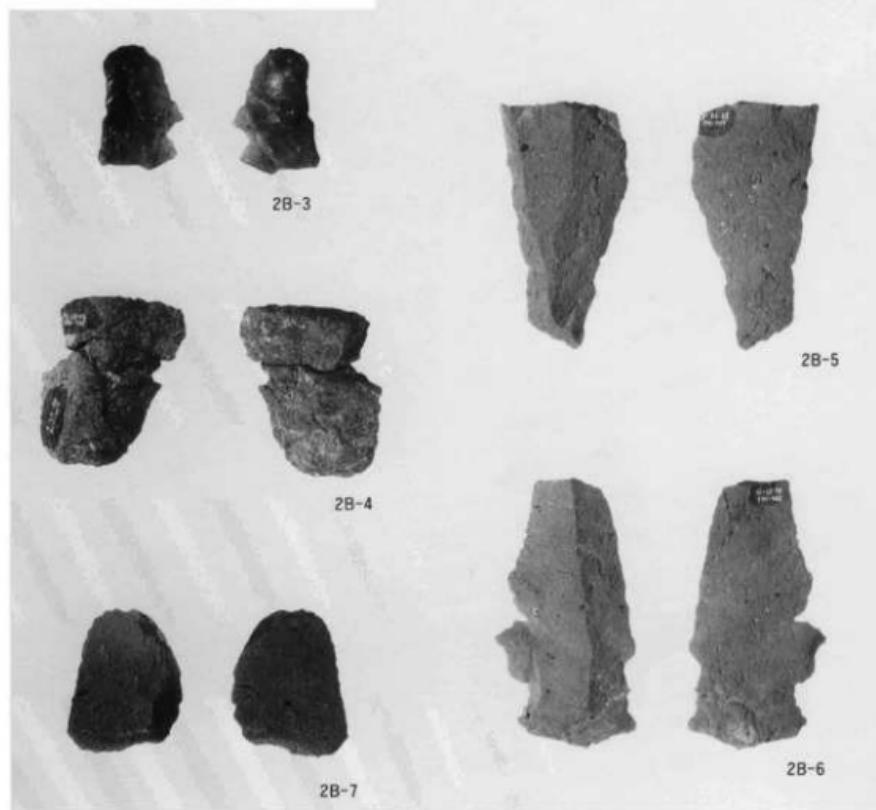


1B-1



2B-1

2B-2



2B-3

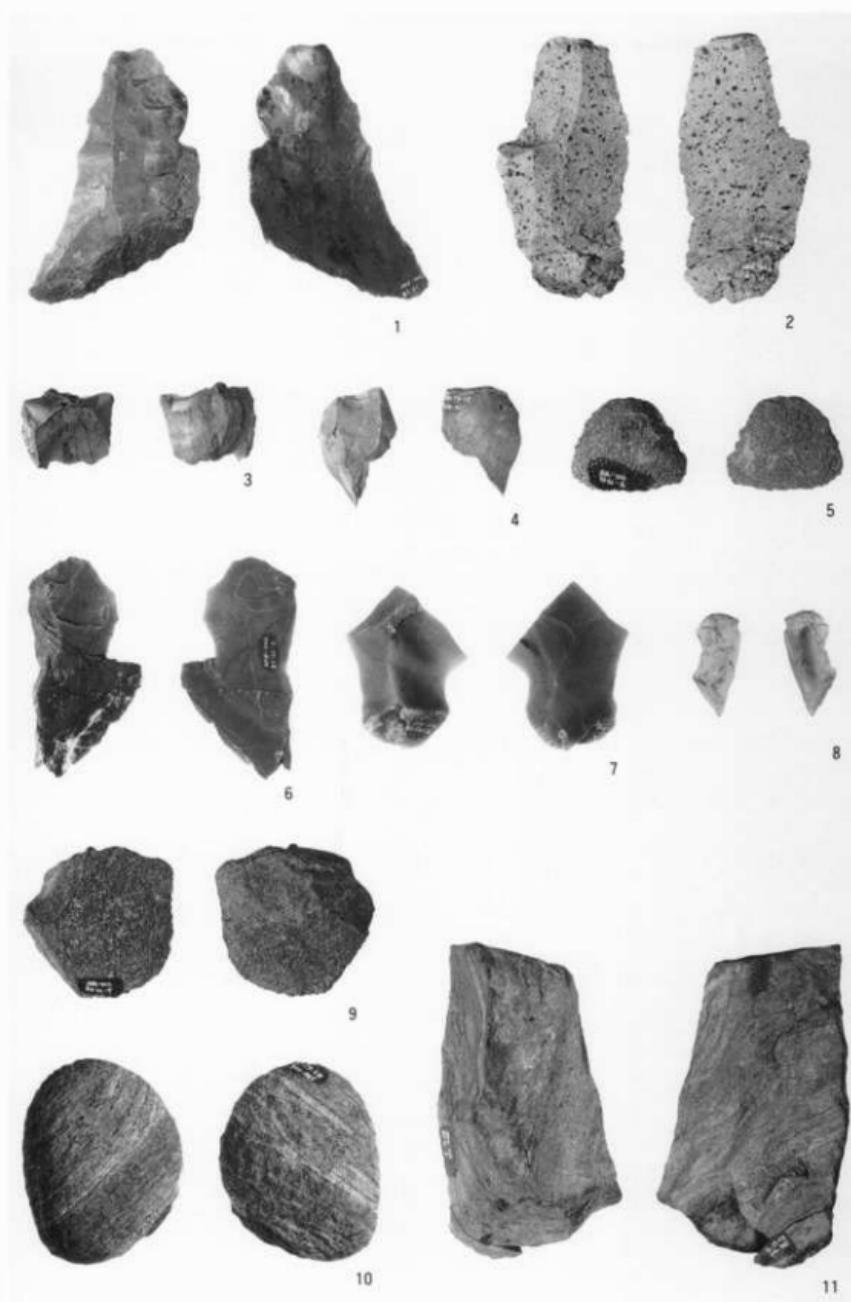
2B-5

2B-4

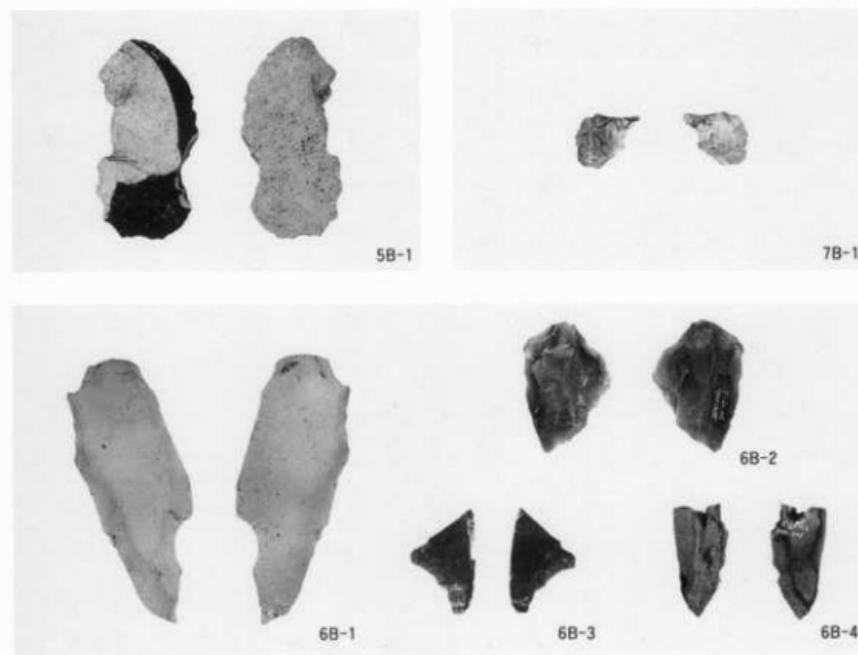
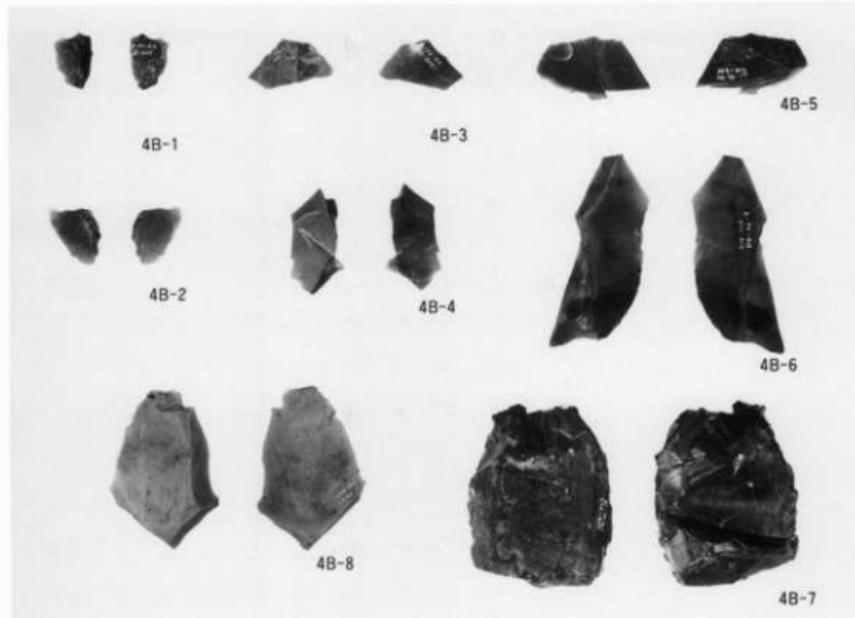
2B-6

2B-7

第1, 第2 ブロック出土石器



第3 ブロック出土石器



第4, 5, 6, 7 ブロック出土石器



1 001住居跡出土遺物



2 002住居跡出土遺物(1)



1 002住居跡出土遺物(2)



2 003住居跡出土遺物



3 004住居跡出土遺物



千葉県文化財センター調査報告 第204集
船橋市夏見台遺跡
-船橋夏見郵政宿舍・簡易保険福祉事業団船橋夏見宿舎新築に伴う埋蔵文化財調査報告書-

平成4年3月21日 印刷

平成4年3月31日 発行

発 行 関 東 郵 政 局
東京都千代田区大手町2-3-2
TEL 03-3243-4534(代)

簡 易 保 険 福 祉 事 業 団
東京都港区赤坂2-3-4
TEL 03-3586-4311(代)

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡無番地
TEL 0434-22-8811(代)

印 刷 株式会社 正 文 社
千葉県千葉市都町2-5-5
TEL 0472-33-2235(代)